蹴　球

第九號

August——1942

東京商科大學蹴球部誌

昭和十七年三月 予科三年生を送る

内田 瀬上 佐藤 奥村 永倉 西内 外池

高橋 遠藤 加藤 荒川 野尻 浅野 川端

松浦 古賀 太田 安田 鷲埜 助川 金原

昭和十七年秋 浦高戦勝祝賀会

於 中野 立美野

鷲埜
太田 高柳
佐藤 岡本
西内 □□
金原 荒川 加藤 □□
瀬藤 松浦 永倉 川端 奥村
土屋 床宿 松岡
安田
高橋
竹山

昭和十七年九月 予科三年生を送る

高野 □□
松岡 □□
床宿 岡本 助川 奥村
川端 荒川 西内
野尻 西浦 松浦
西浦 金原
永倉 高橋
佐藤 加藤
竹山

昭和十八年七月 瀬藤、土屋両兄を送る

金原　永倉　加藤　荒川　奥村　川端　松浦　高橋　松岡　西内　安田

高柳　太田　瀬藤　土屋　床宿　鷲埜

昭和十八年冬 先輩の武運長久祈願
鎌倉 鶴岡八幡宮

松本　床宿　高橋　田島　鷲埜　松岡　川端　高柳　重見　神野　大掛

奥村　荒川　永倉　瀬藤　西浦　松浦　加藤　西内　金原

奥村　高柳　岡本　安田　加藤　中西　松浦　西内　床宿

鷲埜　永倉　金原　太田　川端　佐藤

昭和十八年秋のサッカー部員

奥村　林　安田　高柳　金原　松浦　加藤　西内　床宿

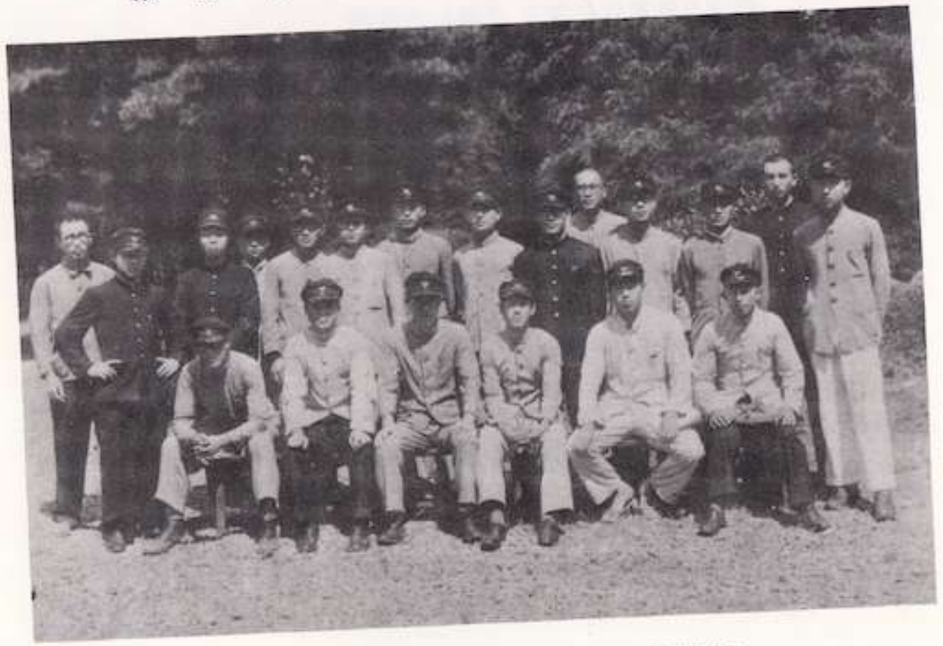
鷲埜　永倉　武市　太田　川端　佐藤

多摩湖線　商大予科前駅にて
（昭和16年）

坂井　中西　林　森　加藤　渡辺　布谷　小島　高柳　大河内　鎌野　茂木　床宿　岡本

助川　金原　古賀　安田　荒川　石井　高橋　加藤

田淵　川端　永倉　奥村　佐藤　加藤



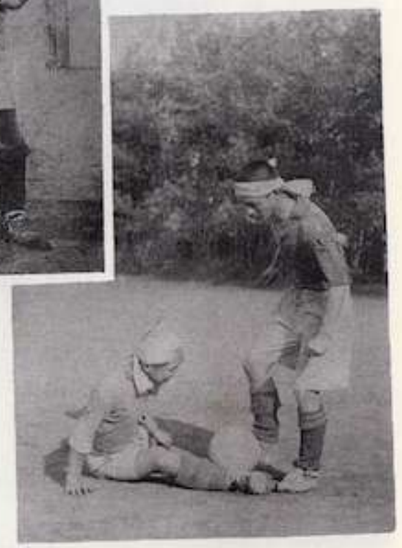
昭和十八年九月　予科送別（前列卒業生）

奥村　松浦（弟）
永倉
加藤
太田　松浦

昭和十七年夏　房州興津海岸にて

土屋　瀬藤

右　荒井文雄先輩



土屋　瀬藤

巻頭言

主将　瀬藤俊雄

輝かしい伝統を保持してゐる我がサッカー部に危機が到来してゐる。かつて我がサッカー部はどん底に迄落ちて、その底から故長瀬先輩の熱心な指導の下に、毎年優勝と言ふ偉業をなし遂げて、一部の有力チームに迄成長したのであった。其の後一度二部に落ちたが、すぐその翌年には二部で優勝して一部に復帰してゐる。

私は思う。二部の水に馴れてしまふやふなことがあれば、我々は永久に一部になれないのだ。と

来年のシーズンに我々は何としても二部優勝を果さねばならない。サーカー経験者の少い我々の部は猛練習による体力と気魄に依って技術の拙さを補って来た。今年は大量の卒業生を送り出して、人数も多いとは云えない。しかし我々は先人の偉業を振り仰ぎ、自らに鞭打って、苦しい練習に耐へ、二部優勝を果すことを誓うものである。

目次

巻頭言 …… 1
先輩寄稿 …… 17
本科生 …… 38
予科生 …… 58
戦績 …… 61
名簿
附書簡（ハガキ）
編集後記

先輩寄稿

現役諸君に……昭六 豊田達治 1
部史を顧みて……昭十一 神野清一郎 3
故長瀬大兄の言葉に偲ぶ……昭十二 田島輝重 9
憶米山君……昭十二 森田昭之 13
米山大三君……昭十三 村井恒典 14
ブーゲンビルの米山さん……昭十七 藤塚亮策 15
吉沢兄へ……昭十六 松岡義彦 16

本科生

プレイ雑記……本三 土屋五郎 17
雑感……本二 鷲埜和夫 18
迷想録……本二 安田興三郎 20
蹴球部に入ってから……本一 松浦巌 24
試合の思ひ出……本一 荒川正三郎 27
思ひつくまゝに……本一 高橋三善 30
合宿と大掛さん……巌公 33
アンシンメトリー……本一 西田碩男 34
入営に当りて……学部二年 金原実 36
シーズン・オフ……本二 太田賢三 37

豫科生

ポツリポツリ……豫二 永倉真平 38
雑感……豫二 奥村一郎 39
非思量……豫二 加藤春樹 40
感想三題……豫二 佐藤裕之 43
所感……豫一 高柳晋 45
ボール……一年 加藤省 46
感想……豫一 布谷由之 47
蹴球……豫一 鎌野俊明 48
所感……豫一 茂木淳四郎 49
所感……豫一 床宿健美 50
感想……豫一 岡本悦吉 51
現在の心境……豫一 松岡忠治 52
部生活の回顧……豫一 竹山誠一 53
感想……豫二 高柳晋 55
思ひ出すまゝに……豫二 川端良三 56

現役諸君に

昭六　豊田達治

長瀬君が亡くなられてから早五ケ年の星霜がたった。私は丁度大阪在住時代で告別式の日取が通知された日が丁度出張から帰へった夜十時頃で夜汽車に間に合はず翌日たしか日曜日だったが、木津川飛行場から生れて始めての空の旅で羽田へ着き午后三時の大和村の御宅での式にやっと間に合った経験をした。丁度日本晴れの好天気で富士が機の窓からよく見えた事と伊吹の山中で紅葉が美しかった事を思出す。今の現役の方々には御存知ないけれど私は蹴球部が未だ部の体裁を示すよりか寧ろクラブチームに近かった時代の末期に飛込んだので先輩並びに同輩の諸氏は予科でやめるのが通例で六年間通してボールを蹴ったのは其前后三年宛には私以外誰一人なかったと云ふ様な始末で私が本科に入った時予科に入学した長瀬君がすっかり部を築きあげる迄は誠に寥々たる感がして居ったのです。

私が予科一年の時松本、川村両先輩は本三で既にグラウンドでプレイを指導するよりは叱言を云ふ年輩に達して居られ予三に瀬社家氏（現日本ビストンリング総務部長）が独特の風格で我々の主将であり予二には渡辺甚吉氏（現有隣生命社長）が暁星でビルマ人チョウディンから習ひ受けた名ゴールキーパー振りを示して事実上の指導をやり、故渡辺弘氏が全く兄の様に親身になって面倒を見て呉れ城島氏が歌人とも思へぬ凄い眼付で練習をする等印象が深い。

下って新入の面々はとなると津田（現物産ヂャバ駐在）清水（現清水製作所主）故恵藤のフォアワード故山本のハーフ其に加へて小生のゴールと云ったメンバアで当時リーグ戦は一部二部の二

つで早帝慶文理明に一高が一部で農商、外語、青学あとは忘れた位の程度のが二つで二部と云った之又寥々たる有様　それでも一同張切ってやったが今の諸君に比べれば誠に恥づかしい技であり気力であった様に思ふ。二年下に西田君（現西田商店主）を迎へてからどうやらチームとして予科へ練習に通ふのに独りでトボトボ行った。そんな時代に長瀬君が西田君の中学から入り続いの動きが有機的になり其頃は小生より上の人はおろか同級生もなく毎日神田の本科から石神井の習や合宿にも張りが出て練習のためにサボった自分の過去も少しも惜しくなかった。あの頃は思て、神野君広島から二階堂兄君と多士済々精神的にも技術的にも充実して行くのが眼に見えて練想的にも学生界は混沌として帰趨を知らず世間は又バニック続きで不安此上なく今から考へるとよく通り抜けられたと思ふ様な暗黒時代であった。カフェやバアだけ賑やかで学生の中でも頭の鋭いのは左に走り運動部の連中は馬鹿の集りと見られ英語劇や音楽会も浮ついたもの許りやって居た。そんな時世に優秀な頭をもった長瀬君や二階堂君、神野君達が敢然とチームを守り通し、精神的に部を生かして且又技の上に一大飛躍をした事は自分の後輩乍ら全く頭の下る精進振りで啓発される点が多かった。同時にリーグ戦も範囲が広くなり浦高定期戦三商大戦等の参加と共に部の対外関係も多事多端となったのをよく円滑に処理して政治的手腕を示した。之には忘れてはならない後藤博（現三菱商事大連駐在）君の努力が多かった。

次ぎ次ぎにバトンを受ける人達もよく長瀬君以后先輩を恥づかしめぬ人材揃いで私の如きも何一つ口出しを要せぬ儘すっかり御無沙汰して仕舞った。待望の一部昇格の栄冠は長瀬君が卒業して一年で獲得された。

角田、森田、浅枝、荒井、田島の諸君が友情の完成をグラウンドに示し大掛君以下次の時代を背負ふ諸君が之を又次代へ更に活気を与へて伝へた事は蛇足になるから省くけれど現役の諸君には

朧気乍ら長瀬君を中心に其前の部と其後の部との差違を解って呉れると思ふ　長瀬君が宿痾癒えずあたら若冠にして周囲の人々の希望を裏切り逝かれた事は惜んでも尚余りある事であるけれど同君の風格が伝へられて部の人々に再生されるのを見る時私は大東亜戦初の攻撃に真珠湾頭に散った若桜にも比すべき精神の高さを称える。現に荒井君がグラウンドに示した熱情を大別山上に再現して護国の重責に斃れた事を思ふがいゝ

愈々日本の進む方向は多難となり若い世代の覚悟益々厳しさを求められる今日お互ひに自重自愛五尺の身を如何に捧げるか平常から心掛けなければならない。幸ひに松本先輩始めよき指導者を有し前線よりの帰還先輩多きを加えて蹴球を通じて若き日の練成に精進する現役諸君の秀でたる眉を心に描きつゝ筆を擱く。

『部史を顧みて』

昭十一　神野清一郎

蹴球部再建の大先輩長瀬兄没後満五年の今日、この懐しき部誌の原稿を書く機会を与へられたのは非常な喜びであり又感慨一入深いものがある。

長瀬大先輩への深い思慕と兄から与へられた強き感銘から想ひ出の一片を書いて自分の知る昔の部を考へ、現部員諸君の御参考の一助ともならば幸ひと思ふ。

昭和五年春石神井原にあった予科のバラック校舎に商大蹴球部員として入れて貰ってから既に十三年になった。この間の部の歩みは相当変化の多いものであった。

昭和五年吾が部が二部にあり同年全敗して三部へ昭和六年三部に全敗して四部に転落し昭和七年四部最高位にて三部へ昭和八年三部にて全勝二部へ昭和九年二部に全勝して一部へと破竹の勢を以て躍進し爾後三年程後に一回二部に落ちたが翌年直ちに一部へ戻り其後善戦健闘して母校の面目を遺憾無く発揮したのであったが本年不幸にして二部へ落ちて今日に到ってゐる。

勝敗及び部位の変化に依って直ちに真の姿に於ける部の盛衰を論ずるは早計にして、その原因、萌芽は常に数年前に遡って考へてみなければならぬ。自分は現在の部を語る資格は無いが、昭和五年後の六年間に二部から四部へ、四部から一部へとの転落と再建の波乱多き部史と長瀬兄とを結びつけて略述し度いと思ふ。

自分が予科一年の時、予科三年の長瀬兄が予科の主将であって、予科の部員は十数名であった。当時の吾が部は実質に於ては殆んど予科生が主体であった。当時の部の大半の空気は戦っては敗れ、敗れても反省する者も少く、部員はバラバラで練習には何時も五、六人がボールを蹴ってゐた。試合にキーパーが欠員すると籠球部から臨時に出て貰ふと云ふ始末であった。グランドも極めて粗末なものであり、ラグビー部と共同に使用して居り、雑草が生えて練習の前にはシャベル等を使用して草株を除去し、清掃作業をしてから、ゴールポストを建ててボールを蹴ったものだ。この感激の無い衰微しゆく部の主将として長瀬兄は、小さなバラックの部室に黙々として何事か考へてゐた。

少しの虚飾も無い態度、真黒な顔をした瘠形の元気な長瀬兄が何時も唯一人ポツンと部室の壊れかけた椅子に腰掛けて部員の一人でも来るのを楽しみに待ってゐた。あの姿が今も、はっきり想起される。

長瀬兄の胸中に張ち切れんばかりの誠の力が、有らゆる機会に於て爆発の一歩手前迄来た程の

熱意を以て指導してくれたが、その甲斐も無く昭和五年の秋のリーグ戦は凡戦に終始して三部に転落して了った。

予科の部員は次第に退部した。翌年は更に減員した。

昭和六年長瀬兄は国立の本科へ行って了った。予科の主将は二階堂兄となった。

この頃長瀬兄は部への徹底的精進から体が不調になり御父君からは蹴球を堅く禁ぜられる様になった。にも拘らず責任感の強い兄は国立の本科に移ってからといふもの、晴雨を論ぜず長途を問はず春の練習から毎日々々石神井に来て黙々として予科を指導してくれた。

今にして思へばこの長瀬の真剣なる精進と熱意の前に自分は何故もっと早く一身を投じ得なかったのかと自分の及ばざるも甚だしきに長瀬兄に対し実に済まないと思ってゐる。

病を押しての不屈の精進にも拘らず、当時の部の空気は末だ建直って居らず真の協力者二階堂兄一人を得たのみでこの年も終り三部に全敗して四部に転落して了ったのである。

長瀬兄の気持を知らぬ者は、一人減り二人減り部員は数人になって了った。

然し乍らドン底に落ちゆく当時の苦戦苦闘の中に長瀬兄の黙々たる実行力は遂に人二階堂兄を得たのであった。

苦境が加重するに従ひ部が離散せんばかりの危機に直面するに従ひ、長瀬兄と二階堂兄との親交は愈々深く益々厚くなって此処に商大蹴球部再建の萌芽が力強く伸びつゝあったのを見逃してはならぬ。

四部に落ちた当時の気持は全くドン底に転落する気持であった。他の部からは蹴球部存在の価値無しと迄極言され、予算も大きく削減されて了ったのである。

人の力を以てしても如何ともし難き状態になって了ったのである。

この苦境の中に於ても長瀬兄の態度は変らず唯黙々として勉学に於ても蹴球に於ても物凄く精進され、身を律すること極めて厳にして先づ身を以て範を示し、病弱の体は斃れはしまいかと周囲の者が心配したこと屢々であったが、旺盛なる責任感は常に部員に深い感銘を与へ、二階堂兄は長瀬兄と一体となって、兄の肉体上の弱点も補強し、兄の誠の力を発揮する強大なる原動力となって手の附け様の無かった四部転落の苦境を克服遂にこの年四部に優勝することが出来たのである。この優勝は実に貴重なものであって、二年連続落勢のついた部を上向けるのは実に容易なものでなかったのである。

爾後連年連勝部は優勝の一路を邁進し、四部にては予想し得なかった一部の強豪に列して堂々戦を進めるに到ったのである。

予科三年間の長期に、不況苦難の中に苦しみ抜いた長瀬兄が部再建の力は予科に在りと看破され予科の育成に病軀を押して尽された努力が如何に地味にして深いものであったかは、自分の如き凡人に測り知ることが出来ないのである。

ドン底にあった四部の当時ですら長瀬兄は常に高遠なる理念を以て指導精神ならしめんと、よく我々に語られた事を覚えてゐる。今から七、八年前の話である。

長瀬兄曰く「日本海軍の演習は実に物凄い。演習は常に実戦以上の苦闘である。為に人員艦艇の犠牲は頻々として出る。然かも演習は更に猛烈に行はれてゐる。蹴球部の練習も此処に大いに学ぶ所があるではないか。

練習は常に試合よりも苦しいもので無ければならぬ。然らざれば実戦に役立たない。一回のボールを蹴り一度のストップをするにも漫然としては役に立たぬ。実戦に役立たぬ練習は止めろ。常に頭は試合を想定しなければ練習の価値は無い」と。

又或時は「ランニングパスは走らなければ価値が無い。走力の遅いものは出足で補足せよ。敵よりも以上に走らねば敵に優る力を発揮する事は出来ぬ。戦に勝てないのだ。」と

病弱の兄であったが、その指導理念は烈々たる熱が充溢し、言行一致して当時の自由経済時代の大学生活に対する深き反省の課題を与へてゐたのであった。

この高遠にして核心から出発した指導精神が二階堂兄に依り着々と実行され志を同じくする貴重な数人の部員が黙々として従って行った処に不可能事と考へられてゐた部の再建が可能となったのである。

二階堂兄は予科の主将から実質上卒業迄商大の主将であってこれを力強く補佐した後藤兄ありの特徴を遺憾なく発揮して此処に長瀬兄の精神は次第に数人に及びその力は積となって現れて来たのであるから四部から出発した時の部の団結は愈々堅く不敗の基礎が築かれて行ったのである。

長瀬兄の斯くの如き強硬なる指導精神の許に部員は黙々として従って行き服従から敬慕へ信仰へと迄進んで行った兄の反面は、更に底知れぬ慈愛に充ちた先輩であった。

真面目に部を考へてゐる部員の心境には誰よりも深い同情者であって思ひ遣り厚く、兄と話して居れば有難度い済まないと云ふ気持で一杯になったのは自分一人でないと思ふ。

純情さ部に捧げ尽して護国の英霊となられた荒井君が何時も「長瀬サン長瀬サン」と慈父の如く慕って部を生活の全部として商大を卒業したあの偽らざる荒井君の姿が今もはっきりと目に浮ぶ。

長瀬兄の急逝を荒井君はどんなに悲しんだ事か又勇戦奮斗名誉の負傷をされた荒井君が淋しき野戦病院の病床に長瀬兄を如何に慕って瞑目されたかを思ふ時堪へられない気持がする。

角帽の長瀬兄は未だ事変勃発前「日本は将来の為支那の事情を大いに研究して置く必要がある」と云われ、又卒業に際しては「俺は自分の会社には入らない。将来の日本の為重工業に身を投ずるのだ」と三菱鉱業に入社され社会への地味な第一歩を踏みだされた。

自分は本三の夏、九州戸畑の合宿に長瀬兄を尋ねた時、兄は益々元気旺盛で「俺は出社時限より一時間早く出て、其の日の仕事の準備をして置くのだ」と前夜の痛飲の翌日と雖も、自分が目覚めた頃は既に出社後であった。

卒業後も常に部を思ひ部員を思ふ熱ある指導に涙を流して感激し帰京して、その秋初めて臨む一部の檜舞台に商大蹴球部は如何に戦ひ長瀬兄の恩に酬ひんかと苦しみ、及ばざる自分は最後は部の建闘を神に祈るのみであった。

「将来蹴球部員を以て会社を作り日本の産業界に大い働き度いものだ」と人の力とその力の和を常に強調して居られた長瀬兄の報国の言葉の意味する所は誠に深い。兄の人格はボールを蹴って築かれて行ったのであるが、既にそれを超越して蹴球は一つの真の学問であり、人生の尊き段階となってゐたのである。

本然の姿に立ち直らんとする今日の皇国の歩みが、十年前の蹴球部にもその萌芽があったのを痛感する。

麻雀、かるたその他の遊戯にも熱中された兄ではあったが、これは皆一つの小さき方法であって猛烈な練習の反面に、部を温かい愛の境地たらしめんとする深い思ひ遺りであったのだ。

長瀬兄は蹴球に生き蹴球に斃れたと云へる程の短き一生であったが、兄の尊き生命は商大蹴球部に捧げ尽され、その生命は永久に部の中に生きてゐるのである。

如何にドン底に落ちた部に在っても常に余裕綽々隠忍自重一歩一歩と再建へ進まれて行ったあ

の不撓不屈の兄は最後にその尊き生命を部の為に使ひ果して斃れたのである。

四部当時の兄の心境即ち部の再建は一人では到底出来ない又、一朝一夕に成るものではない、自分の時代に出来なければ自分の責任は次の時代の人々に果して貰ふのだ、その人を作りその基礎を作って自らは功を求めず楽を追はず着々と再建への準備工作に専心すると云ふ長瀬先輩の尊き心境は、今日皇国が直面しつゝある難艱突破に際して大きな示唆を与へてゐるのではないだろうか。

蹴球部将来の途も実に多事多難であるが、茲に部員各位の積年の御努力を衷心より感謝すると共に、尊き長瀬兄の生命を温かく生かし、飽く迄核心から出発されて御奮斗あらんことを祈って止まない。

故長瀬大兄の言葉に偲ぶ

昭和拾弐年卒　田島輝重

一、理論と政策

生前長瀬兄は常に「俺は経済原論は読まない。政策を読む」と言はれた。空理空論を喜び弄ぶ当時の学生の一人として私も又「何故に」と反問したものである。兄曰く「経験なき理論は死物だ。又一つには俺は人間が好きだ。だから人を扱ふ政策に興味がある。冷い理論はつめこむ必要がない」と

最近しみじみと想ふ所あり体験なき理論の力弱き事を感すると共に人を扱ふ暖かさの必要を教

へられ　今更に兄を偲ぶや切なるものがある。

政治といひ政策といふ必ずしも目的主義の無定見無節操を意味するものではない。否寧ろ高き思想と清き理念の下にこそ政策は指導性を持ち政治は生命を持つのであって、皇道政治の理念は一あって二あるものではない。我が長瀬兄は当時にあって既ニ西欧学理の大なる欠陥を日本人の叡智と血と心よりして夙に直感されて居ったと考へられる。

吾々が欧米思想に少く共無批判的であっに不拘、兄は早くも自己の有する理念を以て之等を批判咀嚼されて居ったのだ。

然しこゝに重大なのは大兄をこゝまで育みしものは実に我が蹴球部苦難苦斗の歴史に敢然光栄ある指導者たる重任を負はれた忍苦不屈の尊き経験と円満なる御家庭に育った愛の人生観の賜である。運動競技殊に蹴球に於ては一にも二にも訓練である。経済の最少犠牲最大効果を考へ得るものではない。即ち行の精神に徹底して初めて或物を感得するのである。しかも得られたものは自己の否定であり自己を団体の中に没入してしまふ凡そ最少犠牲と正反対の概念である。其れは客観的冷視的批判でなく自己を先づ渦中に投ずる事であった。兄より蹴球を通じて体得された日本精神を折にふれ事につけて範示され指導せられた吾々は今想ふも幸この上なき後輩であった。

想へば兄は政策の勉学には実に熱心且真剣であった。当時商大に数多く畏兄、畏友ありとはいへ自らの体験を実例に講義に味ひ聞かれ学びて直ちに之を部指導の上に生かされたる兄の如きは蓋し他に之を求むべくもない。大長瀬は一社会の縮図を蹴球部に見出ししかも之を高く清き理念を以て純化し、汚れを知らぬ若人の熱と力、誠と愛の練成所たらしめんとした。共甘同苦の幾年か、遂に衆心帰一し一人格は上下に貫通するといふ指導精神を確立し蹴球部そのものが一つの人格であり、大長瀬の精神となった。兄卒業の後、吾々の主将浅枝が主将たるの心構へを質せる所

主将の人格に感化帰一せしめよと答へられた。この一言、言ふは易く行ふは難し、されど大兄は之を行ひ之を言った。この指導理念は、今も生きてゐる。それは昔も今も変りなき調べをたて、一橋蹴球人の血脈を流れてゐるのだ。

不二いたゞく松風寂びて汗涼し

二、男の涙

今は亡き長瀬大兄が末だ在学当時の事だった。父を失ひ母を失ひ打ちつゞく不幸に身心共に疲れた私は退部を決し、大兄や二階堂兄はては松本大先輩迄御心労を煩はした事があった。冷い社会の風に面した私は最早呑気な学生ではなかった。悩む心に練習は苦しく辛かった。当時の或夜大兄の部屋に対座して大兄の日記を見せられた。「……俺は今日田島の泣くのを見た。男が泣く。涙が流れる。涙は善人の心からのみ流れるものだ。俺は信じてよかった。田島は泣いてるではないか。今日しみじみと男の涙の美しさを知る……」

右の様な文句が認められてある。読む私の眼はかすんでしまった。かくも信じて下さったのか。大愛は大信を生ず。私たるもの又この大愛に何をもって報ひ得よう。今や大兄既に亡く早くも五星霜を送る。私は唯大兄の遺志をつぎ大愛の政策を大信の信念を己が職場に守りつゞけるであらう。我が蹴球部に入り来り、育まれる者よ、蹴球部生活に大長瀬の声を聞け、姿を見よ、それは常に、主将の心に声にのり移ってゐる。その大愛に大信に、男子たるもの感奮以て大一橋蹴球部の伝統を守り輝かさずには止むべきではない。蹴球に生き蹴球に死したる大兄の限りなき大愛に温む眼ざしをボールに見出し小平の碧空にその激励叱咤の声を聞く一橋蹴球部員は誠に幸福である。大兄以て冥せよ、私共はそれぞれに兄の道を守り継ぎ、死せる兄をば生かすであらう。

一しづく露匂ひあり菊の花

三、ボールを恋せよ

「蹴球部員は皆ボールと恋愛せよ　熱愛せよそして女性と恋を語るな……」

一橋蹴球部が沈滞の空気より立直ったのは大長瀬のこの精神だった。先日昔なつかしいまゝに国立の箱根土地のグランドを訪れたが今は荒れはてた草原に、崩れかゝったポストが一つ寂しさうに立ってゐた。かつて長瀬兄との猛練習の地だ。死んだ荒井君が往復マラソンの王座を占めザバラといはれた頃の事だ。病後の長瀬兄と私がラストを承った頃だ。だがフォーメーションともなれば一心に走り込む兄の熱は、キーパーたる私の心胆を寒からしめるものがあった。病後の兄のどこにこの力があるのだらうか。書く程に綴る程に兄の言葉はつきざる想ひ出と共に次々と浮び上って来る。そして筆は乱れて何もかけなくなってしまふ。

私は唯大兄が懐しい……

私は大兄を知る人、知らざる人に大兄を語り想ひ出の言葉を送り、相共に追悼の長き黙禱を捧げたい。

良夜一人酒を汲みたり凱昭忌

於　北京　昭和十二年　森田昭之

拝啓

久敷御無音に打過ぎ御詫び申上候承れば此度亡き戦友米山兄の追悼号を刊行せろるる由

『想ひ起せば六年前の大三兄の颯爽たりし、温健にして思想中正よく委員長の重責を完うせられ将又部の女房役として母校の敢闘精神を東都の諸強に伍して発揮せしめるの原動力たりし事を。昭和十五年目出度く　成り幾何もなく御召により勇躍征途につかれ瘴癘の地に奮戦中可惜勇途半ばにして散華せられたり今前途多幸なる兄を失ひ我等が悲み之に過ぐるはなし、然し乍ら戦局愈苛烈に北に南に米英の爪牙鋭く我等蹴球部の一員として、戦友として味方の屍を乗り越え適を圧倒殲滅せずんば止まずと』

遙かなる北支より兄の為萬哭の哀悼の言葉を捧ぐると共に再度のお召を待ち乍ら地下資源の開発に微力を　しある次第に候。

先は右迄

二月廿二日

敬具

早野広太郎殿

米山大三君追憶

昭和十三年　村井恒典

南海ノ鬼と化ラレタ大三君ノ魂に捧ぐ

今を去る十年前陽光サンサンと注ぐ小平原頭之が大兄と小生の初対面の舞台であった。当時、サッカー部は正に二部の覇者たるべく最も好潮の波に乗った時だった強い近視の黒縁眼鏡をかけた五尺の短軀大兄は異常なる期待を以って入部せられた。蹴球部に入部する者多き中に初めから斯くも明確な強固な意志と期待を以って入部された者も少からう。意気と団結と理想に燃えた運動部を望んで入部せる大兄の其後ノ行動亦以って範とすべし、黙々とボールドに向って独り練習一日の練習を終へて皆部室に引上げる時大兄独り暮れかゝる球場に残って球を蹴り之を追ひ……倦むを知らず

失礼ながら入部当時は蹴球に関し一句ノ知識もなかった。大兄の卒業する時の名監督振り、都下有数の否日本の球界に押しも押されもせぬ立派な部と育て上げて卒業された大兄の得意思ふべし不幸にして小生は大兄の軍服姿を見損ねたが写真に偲ぶ大兄の面影さぞや立派な模範兵であったらう。一人の模範兵は中隊の空気に影響する赫々たる戦果は常に最も大きな犠牲を必要とする。惜しみても余り有る大兄の靖国の神去りました事は国民の感謝を捧げて措かざる所　大兄は末だ末だ小生の心の中に生きてゐる　永久に生きてゐる

捧　拙　文

加藤春樹様

昭十七　藤塚亮策

闘ひ抜かれて、ブーゲンビルの病の床に南十字の星を仰ぎながら米山さんは何を思はれたであらうか。蹴球部に於て米山さんの築かれた輝かしい偉業を惨めに覆して了った私は、せめて南海の果てに兄の仇を蹴散らして魂魄をお慰めしようと念じて来たのであるがそれも許されなかった。頬を赤らめ瞳を輝かして南に征った多くの戦友の晴姿を羨ましく見送らねばならなかったのも人の世の運命と云ふものであらうか。然し私が帝都の一角で昼となく夜となく睨み上げてゐる大空はガダルカナルの大空に遮るものもなく一筋に通じてゐるのだ。私の心が弱くなった時、何時も私を支へて呉れるのは蹴球部であり米山さんの魂である。私が敵機を撃滅する瞬間は蹴球部の魂が脈々と息吹いてゐる瞬間なのだ。小悧巧な価値判断を抜きにして蹴球部を熱愛する心は、とりも直さず国に殉ずる心なのだ。蹴球部に育った若者は軍隊に入って何一つ苦しむことはないであらう。あるとすればそれは小さな自我なのだ。先輩諸氏の御尽力で蹴球部は尚ほ生き生きと激しい闘ひを営み得ると云ふ、全く有難いことだ。一人でも多く蹴球部に育てば、それ丈け国の力は大きくなる。而もその力は無言の裡に津々浦々に迄浸透して行く驚くべき影響力を持ってゐることを信じて疑はない。戦勝の鍵は諸君の双肩に懸ってゐると言っても過言でない。此の期に及んで猶ほ横行する不秩序を打開するのは大衆の大言壮語ではない。選ばれた少数の者が敢てしなければならないのだ。

米山先輩の追悼文を書けと云ふ註文なのに拙い筆が余りにも混乱した頭を整理する力を有たない己の無力を歎じ乍ら飛んだ脱線をして了った。兎に角、今程我が民族が生甲斐を感ずることは曽てなかったし又、未来永劫にないであらう。学徒出征などと云って特別の眼を以て遇するジャー

ナリズムは憫笑にも価しないのではないか。最近忙しかったので返事が遅れて甚だ失敬したが、諸君の健在を祈って一先づ筆を擱く。

吉沢大兄机下

昭十六　松岡義彦

御無沙汰して居りますが御元気の事と拝察致します。先日は度々御電話載きましたが、如何にしても家より隣の方へ電話が通じなかったようで機を失して了ひ誠に残念であり、大変失礼致しました。

星野さんにも是非御会ひし度かったのですが、一寸御無沙汰してゐる間にも目まぐるしく変転して行く未曽有の国難に際して、これもまたやむを得ないとも思ひます。誰も彼も出払って征って了った後に毎日こんな生活を続けてゐるのは何のめぐり合はせか知りませんが、本当に苦痛です。本当に現在の自分にとってやり甲斐のある仕事がやり度くて仕様がないのですが、此度一年許り蹴球部の方々とも全然御無沙汰して誰が何処にゐるのやら、何をやってゐるのやら全く分らなくなって了ひましたが、皆元気の事と希ってゐます。現在暗号の特別教育を受けてゐますので此の方で出る事になるかもしれません。右御詫び傍々近況御知らせ迄。

六月一日

《プレイ雑記》

本三　土屋五郎

敵ゴール前で少し上ったボールを敵味方が競合をして、将にヘッディングしようとする時、其の側をゴール目掛けてダッシュする事。奇妙に目の前にボールが落ちて来る。

× × ×

敵ゴール前の混戦と見るや機を逸せず、その混戦の中のボール目掛けて突進する事。と思はずボールが足の先に転り当って来て呉れるのでとんだ拾ひ物をする。仮令ボールが出て来なくとも、其儘混戦の中に混入して行って中のボールを追った方が良い機会に恵まれる。混戦の周りで待ち構へてゐるのは良い時も有るが、大概ボールを得る機会も少く有っても敵が直ぐ寄って来るし、又、スタンディンで焦り気味であるから必然ゴールを陥す迄には行かなくなる。

× × ×

個人技に就ては、蹴球の書を読み又は他人の忠言を聞くよりは、自分の内より醸て来る向上への糸を自ら自分なりに伸ばす可く努力した方が、より捷径であり、より大なる発展がある。

× × ×

或るプレイの上達とは勘を覚える事であり、自ら会得すべく努力するが、試合等で何かの拍子に、思ひ掛けず不図体得する事がある。すると、其のプレイがそれ迄とそれから以後と、判然区別がつくのは嬉しいものである。

× × ×

特別にドッヂング等と云ふものは有り得ない。ドリヴルして行って敵が来るから避ける迄の事で、ドリヴルの延長に過ぎない。併しボールをドリヴルして居るといふ意識が有る間は、先づボールを足で処理し、次に敵を避けなければならぬと云ふ二段階を経るから、何うしてもボールを敵に奪られる事になる。所がボールと足が一つになり、ボールをドリヴルして居ると云ふ意識が無くなれば、普通の駈足と同じである。敵の足が見えるから避けて通る丈の事である。

❧❧ 雑感 ❧❧

本二　鷲埜和夫

此の春、帝大のグランドで立教に敗れて、二部陥落と決定した時、選手を囲んで、みんな泣いた。あの時の事が昨日あった事の様に生々しい。皆が風呂屋へ行った後、一人であの岡に立って優勝した帝大の新メムバーの何かゆとりのある練習を眺めてゐると又新しい涙が溢れ出て仕方なかった。

秋のシーズンも半ばは過ぎた今日、静かに振り返って見る時、あの時流した涙は決して忘れた訳ではなく、否、拓大、専修等二部のチームの試合を見るにつけより現実的なものとなってよみがへって来るのであるが、それにしても九月の合宿以来の練習は自分として誠に至らぬ所許りだ。

自分の事ばかり書いて恐縮だが、此の十一月の自分の誕生日に、母から「健かに、逞ましく、誠実に、」との言葉を載いた。自分の弱点を今更の様に身に泌みて感じると共に、従来の自分の部

生活、練習態度を深く反省させられた。健康でない、逞しくない、誠実味に欠けてゐる。「人間は時には背伸びをしなければならない。そして或世界ではその背伸びがその儘その人の身長となる事がある。と何かの本に書いてあった。その言葉を自分はしっかりと胸に抱いてゐた。部誌に書く時、会の席上話す時、その言葉を忘れなかった。色々な機会に瀬藤さんと話す事が多くなるにつれ今迄その言葉に寄せた自分の信頼の間違ってゐた事を知らされた。自分は逃げ道を造り度くない。あの言葉で自分は自分を窮地に突きつめ様と思ってゐたが結果は反対だった。自分のずるさが此所にも顔を出してゐた。子供の時から自分は「あの子は顔色が悪い、ひ弱さうだ、要領がいゝ」と云はれて来た。此の最後の言葉は一番母を心配させ、厳しく躾けられそして自分も此の言葉が最も嫌ひになった。部生活に於て、毎日々々の練習に於て自分の此の欠点は痛切に身に応へた。まだまだなほらない。蹴球部に於ける程、生活に対する誠実の要求せられる事はない。生活ではなく人間の誠実さだ。絶えず此の反省に抗ふ為に自分の生活は姑息的になってゐた。どうしてこんなに卑怯なのかと思ふ。「償ひをしようなぞとは思はない」と云ひ切った信徒の神に対する深い誠実が解る。自分は自分なりにそこから瀬藤さんの云う「逞しさ」が出なければならぬと考へて居る。

残る一年有余の部生活の間にも此の精神と肉体の戦の中に弱さが顔を覗けるに達ひない。様々な契機に鍛へ上げて行かねばならぬ。自分の中に二人の自分が居る。一人が「馬鹿野郎」と一人を怒鳴れば怒鳴られた一人はむっつりと考へ込む。それではいけない。「馬鹿野郎」と怒鳴られればカラカラと笑へなければ真の馬鹿に値しない。健康とは、逞しさとは、誠実とは、その境地だと自分は思ふ

× × ×

迷想録

本二　安田興三郎

◇　自覚といふものは、幾ら他人から自覚しろと口をすっぱくして説かれても、字義通り本人自らが覚しなくては生じないものである。僕の中学時代体操の先生が、きまってその授業の後で、各自が自覚して体育に努めねばいくら体操しても何の効果もないと云はれた。だが僕は一向その言葉の意味を理解せず、たゞお座なりに体操をしたに過ぎなかった。僕が体操の意義を自覚したのは、入学試験の不安が近づいて、自分の体格の貧弱さに気がついた頃であった。之ではどうしても体格検査ではねられさうだ、それには出来るだけ肉体の鍛錬につとめねばならない。さしあたり体操の時間にも型通りやるだけでなく、身を入れて自分から鍛へる積りで熱中せねばならぬと気がついた。そしてハハア先生が何時も言ってる自覚とはこの様な事だなと思ったのである。大変ピントの外れた例かも知れぬが要するに僕は自覚の困難さを言ひたいのである。またその当時は自覚したと思っても、後になって考へてみると、その自覚が非常に上すべりな観念的なものに過ぎなかった事に気がつく事もよくある事である。

◇　元来私は人一倍自覚の時期が遅れるたちと見えて、寮に入って裸になれの馬鹿になれと言はれても遂にその意味を理解する事が出来ず、自我といふものにめざめ始めたのも漸く最近に至っての事だった。

現在の自分はあらゆるものを知りたがり乍ら何が真なるかも分らず暗中模索、僅かに蹴球部にすがって、遅々たる前進を始めんとする有様である。他人から見れば餘りにも愚かしく情なく見えやうが、之が実際の今の自分の姿である。

人間は考へなければ進歩せぬといふ。私は従来滅多に考へる事をしなかった。その癖空想力は旺盛なものであって暇さへあれば楽しいおよそ現実とかけ離れたロマンチックな夢想に耽るのであった。そして己の欲する所に従って蹴球をする、映画を見る、本を読む、読んだ事を暗記する、唯それだけであった。蹴球の意義如何、本を読むことの意義如何、それ等に就ては滅多に考へた事はないのである。たまには反省もする。然もそれは至って浅薄な反省であり且、その効力は長く持続しなかった。信念もなく懐疑もなく虚無もなしに朝を迎へ夕を送って行った。そして結構落第もせず、商大生ですと云っても嘆かれもせず蹴球をやってますと云っても怪しまれもしなかったのである。逆境に立った事のない僕は安逸に狎れ過ぎた。徹底的窮境に追ひつめられる事もなく、困難にあへば頬冠りをして通り過ぎ、一面に於て自分の利益に反せぬ限りに於て慈善心や親切を発揮して自分は善良だ等と自惚れる哀れむべき存在が生じたのである。

◇　過去数年間の盲目的な生活を悔恨と共に思ひ浮べる。中学時代の他律的な生活に馴れた自分は予科に入って受験勉強の束縛から解き放されるや、反動的に凡そ学問的雰囲気から遠ざかって行った。読むものは小説ばかり、それも皆興味本位であった。そして翌年スクリーンの魅惑に憑かれるや遂に映画に溺れて知性を喪失し他の世界への興味を失ってしまった。余りに従来の生活とかけ離れた寮や予科の生活に戸迷ひして、個人主義的な自我の殻の中にすくんでしまった自分は、漠然と入った蹴球部に於て他律的生活にめぐりあった様な錯覚に陥入った。そして蹴球と勉強といふ問題にも悩まされず部生活の意義を究める事もなしに唯漠然と何かゞ得られるだらうと思ひ乍ら上級生や友達に引ぱられて部生活を送って行ったのであった。或る時は練習の過激さに或る時は部生活に束縛を感じてぐらついた事もあったが、自分に欠けて居る多くの美しい美む

べき性質に満された部の雰囲気に惹かれ、又自分の隠遁的、退嬰的性質の矯正にはこの蹴球部生活こそ良い薬もあるまいと思ふやうな功利的な考へによって、いはゞ禅の修行みたいな積りで、怠惰な心に鞭打つゝその日を送って行ったのである。

勿論蹴球に愛着を感じなかった訳ではなく入部した時も蹴球が他の運動より好きだから入ったのであり、又年々その感は深くなって行くのであるが末だ蹴球と恋愛する境地に達してゐるとは言ひ切れぬのは汗顔の至りである。今の自分は部生活を修養の場と心得て居るといふのが、一番正直な所だと思ふ。すべて人はその人の心構へ如何によって何所にでも修養の場を見出せるものであらうが、思索と実践の両面に於ける修養の機会を部生活程容易に且豊富に与へて呉れるものは少いと思ふ。而して私が修養の場を蹴球部に選ぶやうな事になったのには何か宿命的なものを感じるのである。

◇　さて映画に耽溺して二年みるべき名画もなくなり、遅まき乍ら他の世界への知識慾も起って来た自分には、必然的に映画の夢から覚めた反動時代が来た。何が正しいかも、自分が馬鹿か利口かさへも分らない。今の私は何が自分に取って緊急な事であるかも知らず、無暗と多くの事を知りたがり、多くの本を読みたがる。思索を伴はぬ読書の危険に陥入って居乍ら平然としてゐる。たまに物事を考へやうとしても思索に馴れぬ頭は散漫として遂に結論を見出し得ず、唯意味あり気に「ストレイシープ、ストレイシープ」と呟く滑稽さである。この様な迷へる私に取っては、生活の基底に蹴球部を持ってゐるといふ事が何たる安定感を与へて呉れる事であらう。

俺は知らない事が沢山ある。だが然し蹴球部の徹底せるとは云へぬまでも徹底し切らうとして苦しんでゐる部員だといふ言葉が何と誇らしく聞える事であらう。

徹底する事の難さは、既に誰も痛感してゐる事と思ふ。「オール・オア・ナッシング」このプ

ランド的な強烈な意志を養成するのはよく凡人の為し得る所ではない。然したとへ意志の弱きが故に徹底しきる事は出来なくとも、それでも何とかして徹底しきらうとする悩みや努力は尊ぶべきではないのか……

ふとこの様な言葉が結局自分の意志の薄弱に対する遁辞に過ぎぬ様に思はれて、何も書きたくなくなるのである。

◇　それはともあれ過去の部生活に於て、私が部から得た貴重な体験は数々あり、また私の因循姑息な性格の改良にも大いに与かって力あったらう事は、蹴球部に入らなかったとした時の自分を想像する事によって容易に知り得るのであるが、自分が蹴球部に酬ひ得た事が果して少しでもあるだらうかといふ事を思ふ時、身の至らざるに赤面せざるを得ないものである。

だが、今まで何度も部誌を読んで、諸先輩の金言の数々を目にしながら、遂に最近まで自覚する事のなかった我が身の不覚につけても自覚の困難さを痛感するのである。又現在の自覚も将来振返ってみた時、如何に浅薄皮相な自覚に過ぎぬものに見えるだらうかといふ事も予想される。

商大は二部に陥ちた。その為に我々には確かに今までより熱心（といふのはとりも直さず今までの練習が恥づべきものであったといふ証拠でこの点先輩方殊に今秋卒業された方々に深くお詫びする次第である）練習を行って来た。だが果して自分は、又他のすべての者が二部陥落の意義を充分に自覚してゐるのだらうかといふ事については何となく不安なのである。自覚の困難さは、ひとがどんなに自覚すべく刺戟を与へても、それは結局効果の乏しい助力に過ぎず、本人の覚醒によらねば達成されぬ事である。

◇　周囲を見渡す、何といふ皆良い達ばかりであらう。皆朗らかで、親切で、優しくて……和気藹々として居る。（そして僕も少しはその中の美点を備へてゐない訳でもあるまいと自惚れ

る）

だがどうも強烈さが少し否大いに欠けて居る様だ。何となく上品で（？）真面目で善良である

が豪放さ野性味が乏しい。蹴球部に一番必要な強靱性闘争的な性質が薄くはあるまいか。

（そしてその弊の最とも云ふべきものを僕の中に見出す）

みんな一緒に逞ましい人格の錬成に邁進しやうではないか。弱い所で妥協せず飽くまで揉みあひ、磨きあひながら。それが結局一部へ返り咲く方法ともなるのだと思ふ。

（十七年十一月）

蹴球部に入ってから

＊＊＊

本一　松浦　巌

久振りに又部誌の原稿を催促される時が来た。今筆をとってみると自分が学校に入ってから送って来た予科の日、自分の成長の跡が振返へられて非常に感慨が深い。今の自分は自分なりに落着いた様だ、併し其迄人から見れば馬鹿に見える様な事に苦しんで来た者もゐる事をさらけ出した。特に予科の人に言ひたい事は、皆夫々種々な苦しい事に出遭ふ時があるだろうけれども其を押切ってやって行く物は何か、其は蹴球と蹴球部に対する愛であり、其は何処から出て来るかは其の人が飽迄部に練習に喰付いて自分を投げ込んでやるの他はない。良く云ふ様に蹴球部の生活は実践の生活である。肉体を以て実感を得るより他はない。真剣にやった者にして始めて得られ

る事である。

自分にとって苦しかった予科時代を省ると、一年に入っ時は中学以来ずっと猛烈な練習をやり、練習の烈しいのは当然の事と何の疑問もなく、只身体が大学の動きに及ばない為毎日くたくたにへばって寮で寝て、騒いで安易に何の悩もなく過した。又部自身も華やかな時で早野さん始め充実した技とメンバーを揃へ部員も五十人近く、リーグ戦の戦跡も見事な物であった。二年になって部屋長として寮に残ったが、一年時代の不勉強が悔まれると共に、隣の部屋長だった文化部の人の影響もあって此頃から何か自分はもっと本当に勉強しなくてはならない。一体自分がやってゐるのは、本当に身を入れてゐるのは何だ、蹴球だけで此の学校時代を過して良いのかと云ふ反省が起きた。馬鹿になって蹴球をやる事其は確に非常に奥深い物がある、が一方学生としてもっと学問的な物其によって何等か自分の行動を価値付け、実際社会を解明し、働きかけ得る物を求めなければならないと漠然乍らひしひしと身内に迫る意欲を感じた。其が生半可に練習に逐はれたと云った形が二年の頃の姿であった。二年の終に古賀さんを失った事は自分にとって非常な痛手であった。其上此の時自分は予科の主将の責任を新しく負った。何とかして自分の生活に安心の行く落着いた道を見出したいと云ふ気持と、主将としての重大な責任と、又春に変ったリーグ戦の猛練習とで喘ぎ喘ぎの気持であった。一層の事はっきり部をやめて自分のやりたい勉強にじっくりひたりきるべきかと考へた事もあった。併し其には自分の気持に絶対許さぬ物があった。そんな事で夜眠られない時も度々あった。では何がさうさせないのか、其は苦しい練習であり辛い事も多いけれども其処に共に其の練習をし本当に部生活に飛込んで来た者のみ知る事の出来る感情が絶対に、部から自分を引離さうとする気持を否定した。俺と云ふ人間の内に蹴球部が喰込

んでゐる。生活の中に完全に融けてゐる。其を棄てる事は自分が半分に裂かれるのも同然だと云ふ気持である。此処に至って、一種破れかぶれの気持で俺の内で其を何処迄統一出来るかやれるだけやってみろと云ふ気持の現れが三年の生活だった。其の前に遠藤が去った。人は其の人なりに夫々苦しみを持ってゐるが、あっさり簡単にやめて行けるのが自分には羨やましい気持もした。此頃からずっと前に、居川さんの言ってゐた、皆やめて了っても一人でゞも球を蹴ると云った気持が実感を持って来た。金原が再び来た事は嬉しかった。此んな気持でゐた為皆を引張って行く事も出来ず、又病気になったり足を挫いたりして本三の方々始め部全体に全く詫びのしようのない済まない事をして了った。二部に落ちたのは凡て自分の責任であると本三の方々の顔を見る度に心の底で刺される様な気持がする。

吾々が学問すると云ふ事は本を沢山読み、知識を積み重ねる事でない事は云ふ迄もなく自明の事であらう。そうして本当に学問すると云ふ事は吾々が毎日烈しく心身打込んで練習をやらねばならないと仝様厳しい事である。何か勉強をやってゐると云ふ安心に陥ってゐる事は情無い事である。と仝時に何か練習をやってゐると云ふ漫然たる気持は恐ろしい。吾々は蹴球部と云ふ真に自分の一身を投込んでやる行動の場を持ってゐる。本当に自己を捧げ切って行動する場を持たない人間はロボットの様な存在だ。此の烈しい時勢の中にあって、且又日本の将来を決すべき時にあたって本当に働くものは、真に行動する場を通じて体験され、生み出されて来た物でなければならない。吾々の練習も勉強も部生活も此でなくてはならないと思ふ。今の自分の気持である。

十七・十一・十三

試合の思ひ出

本一　荒川正三郎

部生活二年半、まがりなりにも本科生となって豫科時代をふりかへってみると一番苦しかったのは何と言っても一年の時の夏の合宿で、あの時の僕の通信に「俺は今迄苦しさといふものを知らなかった」とある。合宿終ってから毎日駈けた道を見た時は感無量であった。これからも肉体的にあのやうな苦しみを味ふ事は先づないのではないかと思はれなつかしく思ふ。

練習の思ひ出は十年一日の如しで大して興味がないから試合の思ひ出を綴ってみたいと思ふ。そも〳〵の始めは予科一年の春の対東高の練習試合であったが、まだ何にも分らず両軍入りみだれて球を追ひ廻してゐると感じただけであった。何しろ入った時はチームは全体で何人要るかも分らなかったのだから。次に覚えてゐるのは春の浦高戦である。池袋からはるばる浦和へ行ったのも始めてゞあり、浦和と言ってもえらく草深い所にあるので驚いてしまった。試合が始ると浦高の連中がわんさわんさ応援に来て太鼓なんか持ち出して来たのには驚いてしまった。試合中で攻められてゐた時五郎ちゃんがハンドをしてしまって、ペナルティを与へられ奥瀬君だったか息づまるやうな中に蹴った球が幸ひにはづれて内田が両手をあげて喜んだ姿が今だに忘れられない。あの試合は一対一で引き分けてしまった。秋の浦高戦も三善の惜しいシュートがあったが河本のドリブルシュートなどあって之も引分けてしまひ懇親会の時瀬藤さんが両軍とも負けたと言ったのを覚えてゐる。

豫科一の時のリーグ戦は本当に感銘が深かった。最初の帝大戦は蹴球祭の日で、観衆はスタンド一杯だった。巌さんが刈りたての頭をてら〳〵さしながらやっていた事を思ひ出す。敵のバ

ックパスの球がころ〳〵ゴールインするのをキーパーが逆モーでどうにもしやうがなかったので一点を取ったゞけで終始押され続けて一人のファーワードに次から次へとアタックしてとう〳〵一点も入れさせなかった。第二戦慶応戦は伝統の力をまざ〳〵と見せつけられた試合だった。前半一対一の同点で後半押され続けてゐたが、そのまゝ閉戦になるのではないかと思はれたが五分前篠崎のシュート成り、続いて二宮のシュート成り、翌朝の新聞にあった如く長蛇を逸した。その後の控室に於ての早野の涙ながらの力強い挨拶が室一杯に響きわたって胸の奥底迄染みわたった。僕はいつも控室で伝統といふものを感じる。早稲田との試合は帝大であった。押されつゞけであったが逆襲に見事奏巧して勝った試合であった。次に東伏見にて行はれた文理との戦は檜のてい〳〵と聳えるグランドの夕暮れの景色と共に忘れられないものだった。ビックツーをやっつけた我が軍がまさか文理なんかに負けるとは思ってゐなかった。スタートはよかった、先づ一点を先取したが、文理ファーワードの物凄いダッシュにさすがの我が軍のバックもたぢ〳〵となり、どん〳〵入れられ、後半早野さんが上って盛んに攻めたてたが、とう〳〵負けてしまって、長い事かゝって靴を脱いでゐた。翌日本科の鉄棒の前の日の当る芝生の上で皆で話し合った事も思ひ出す。

豫科二の最初の試合は豫科リーグ対専修戦であった。試合なるものに出たのが始めてゞあり又二三日の練習だけでウィングをやったのだから、何が何だかさっぱり分らない。始めの内僕の側に球があって始めの十分位でけろ〳〵になって、これはいかんと思ってゐるとそれからは球がさっぱり来ず何だか淋しくなったりした。前半えらく押してオフサイドばかりしてゐたが後半押されて通しで負けて、何だか馬鹿みた試合だった。次の農大戦の時は雨で泥だらけになって走り廻ってゐた。何の事はない一時間許りわめきながら喧嘩してゐたみたいだった。次の法政との試合は

雨は止んでゐたが水たまりの多いグランドでびしゃ〳〵水をひっかけたりひっかけられたりしながら戦ってゐた。押し続けで盛んにシュートした。佐藤が二点も入れて殊勲だった。明大との試合はレフェーリーが吹き間違ひをやって明治の連中が抗議を申し込んでゐた。春の浦高戦は思ひ出してもつらい試合だった。そんなに押され気味ではなかったが河本の活躍すばらしく大量五点を許してしまって、あとのコンバで浦高の連中に盛んに気えんをあげられた。それから新宿に出て本科の人達に叱られた。温室育ちではいかん、あと三年後の商大は誰が背負ふんだ、と。来年になればあの時の豫科が全部本科になるわけである。思ひ出しても恐ろしい試合である。

豫科二の時のリーグ戦第一戦はやはり帝大戦であった。試合の二週間許り前だかに練習マッチで三対〇で敗れてゐたゞけに全員のファイトすこぶる旺盛で、前半村木さんが負傷して巖さんがC・Hをやり瀬藤さんF・Bに松岡さんH・Bに夫々下ってファーワードは四人となったが盛んに逆襲など試みて意気旺盛でとう〳〵一点も許さず引き分けたが強靱なバックは商大の伝統を如実にあらはしてくれた。慶応との試合は一点勝ってゐたが後半C・Kを二宮決めて物凄く嬉んでしまって、商大はその嬉びに圧倒されて負けてしまった。沈滞せる慶応も伝統の力によって勝ったのだ。早稲田との試合は茫然として為すすべを知らなかった試合であった。秋の浦高戦は春の惨敗の後をうけて、剣道場に合宿し、毎晩皆で話し合ったり試合の前の晩には黙想したりして皆必勝の信念の下に臨んだ試合であった。試合は五分五分の試合だった。後半の終り頃C・Kを山川だかヘッドして太田さんと鷲野さんが悲壮な顔をして球と一緒にゴールに飛び込んでしばし動かなかった悲壮な試合であった。

豫科三のリーグ戦では早稲田に勝ったあと控室に皆入ってゐた時居川さんが突然泣き出して一同泣き出してしまった。あとで新宿の珍満で晩飯を食べた時先輩に夫々よせ書きをした事を覚え

てゐる。後の試合は記憶に新しい事であり二部陥落の諸試合で皆の心の深く染み渡ってゐる事だろうから省略して最後の立教に負けた時上野の支那料理屋で各人赤裸々な告白を述べ、僕は瀬藤さんからたてつゞけに酒を飲まされた事を記憶してゐる。春の浦高戦は最后の浦高戦であったが之も負けてしまった。

以上二年半の試合を回想してみたが、試合が終る度にもっと張り切って練習しなくちゃいかんと自分に言ひきかすのだが、部生活の又若き日の思ひ出とし試合は練習とは別の意味に於て感概深いものがある。

思ひつくまゝに

本一　高橋三善

原稿の〆切が迫って来た。何を書こうかと思って一晩中考へたがどうも急には纏らない。それよりも寧ろ思ひついた時に書捨てた筆の一断片でも拾った方が面白からうと思って二、三拾って見た。

× × ×

久し振りで練習が休になったので浜町の叔父の処へ遊びに行った。同じ東京に居ても一年の中五本指にも足らない位しか遊びに行く事が無いので一年に一度の御客様だとか云はれて散々御馳走

になり四方山の話をして居る中に何時しか話は運動の方へ進んで来た。其の時叔母が貴方が運動して居るのも道楽の一つでしようと云った。叔父は道楽に花柳何某と云ふ舞踊の先生について娘と一諸に日本舞踊を習って居るのであるがそれと一緒に考へて居るらしい。淋しい気持になった。道楽等と云はれようとは。恐らく世間一般の人々は運動部に入って風の日も雨の日も泥と埃にまみれて練習して居るのを道楽等と云ふのは極端な方かも知れないが趣味か何かで倶楽部の様なのを作り好きな時に集って楽しむと云ふ風に考へて居るのではあるまいか。華かゝどうか知らないが同一色のユニホームを着て試合をするのを見てそう感ずるのであらうと思ふが。一昨年の蹴球祭の時であったと思ふが入場式を見た友達Kが俺も何か一つ運動しようかな、運動選手は華かだからね。と云ったので其の場で毎日破れたシャツを着て走り廻り時には眼の前が黄色くなると云ってやった。此の様に考へて居る人が多いので運動部に対して何とか云ひ出すのであらう。然しまあ此の様な豎子にかゝづらっても仕方ない。俺は世間の人が何と云ほうと自分の道を進むのだ。可愛いゝ子には旅させろ。苦こそ修養の唯一の道であらう。道楽と云はれようが平気だ。俺は泥にまみれ小平のグランドでボールを蹴って行く。

× × ×

晩飯の時下宿で人の幸福、不幸は人間死んで見て初めて分るのではないかと云ふ話が出た。全く其の通りである。それにつけても考へられるのは良く云はれる蹴球の価値と云ふ事である。予科一に入った時も色々云はれたが其の時は只そんなものかなあと思っただけである。勿論今になっても分り切ったのではないが。これも人の一生と同じに六年間ボールを蹴り部生活をして初めて分るのではあるまいか。其の人、其の人によって相異のある事は人間十人集れば十人共皆違った人間であると同様に。蹴球部生活の価値とは決して型にはまったものでなくて各人が部生活によ

りて得たものであらう。価値云云する前に先づ六年間やって見る事だ。立派な先輩の居る事を思っても必ず何か価値のある事は確かだ。

× × ×

好きこそ物の上手なれ。本を読んで居る中に琵琶で名高い弁天様も其の昔習ひ初めの頃は七福人の一人、何と云ふ神様か名前は忘れたが其の神様を随分悩したものであるが終にはあの様に名手になったと書いてあった。先づ好きであった事、絶えざる努力その結果であらう。人間には天才と云はれる人もあるがその人でも必ず努力がある。最近予科一の人のプレイが眼に見えて延びて来た。帰りの多摩湖で真平君と話した処松岡君等練習を見てゐる時でも足でボールを動かして又見ると云ふ風に常にボールに親しみを持って居る結果であらうとの事だった。選手権の終った翌日予科一の諸君だけ自発的に練習されたそうだが、それで成程とうなづかれた。興味を持って努力されたい。来月五日には浦高戦だ。諸君と一緒に戦へない俺達は諸君と一緒になって試合をする気で居る。後一週間自発的に練習された熱意を忘れずに続けて慾しい。

× × ×

十一月号の新映画を見たが其の中に映画の明るさが大分問題となって取上げられて居た。又銃後の健全娯楽なるものが云云されてゐる。人間苦しいつらいばかりでは生活は困難なものだ。苦しいつらい半面に又明るさ楽しさがなくてはならぬ。長期戦の今日映画の明るさが叫ばれるのも其の為でなからうか。部生活もかくあるべき事は今更言を要しないであらう。

（十七・十一・廿七　初冬の月光を浴びつゝ）

❀❀❀ 合宿と大掛さん ❀❀❀

巖公

二部転落の後を受け新年度再生へスタートを切った合宿は予科の試験も済み、送別会の翌日の九月廿一日より始められた。飯はナイル、気候は良し皆の意気は高調し、今迄にない仲々有意義な合宿だった。殊に其の後半大掛さんから受けた叱咤は有難かった。但し此は後から考へてからである。

恐い先輩は又有難い。合宿も終り近く土曜日皆へばりが出て少し元気が無くなりかけてゐた時神野さん、大掛さんが遠路わざ〳〵来られて一諸に練習された。其の翌日再び掛さんが来られグランドで練習前に此様な元気のない練習をやって何になるとばかり文句を言はれた。皆二部に落ちた記憶も生々しく、意識的に張切った練習をやって来た。当然へばりも出てゐるが、元気を出さうとする事には何の衰へもないと思ってゐる処をけなされた。其の時の皆の気持には確に何をと云った憤慨のが起きた事と思ふ。現に自分がさうであった。済まない事ではあるがあの時は目に物を見せてやると云った気持で練習を始めた。掛さんとドッヂングをやる時等よし一つのしてやるぞと云った妙な敵慨心を起したりした。皆の動きもそれかあらぬか、へばりを超えてファイトを出して充実した練習が出来た。練習も終れば先刻の気持は跡形もなく本当に練習をやった時の満足な感じで晴々した。疲労や何か超越する本当の練習を示して貰ひ風呂から上ってつく〳〵有難かったと感じた。お蔭で合宿は終り近く益々高調に達しあの最后の真暗がりを走ったマラソンに至る迄心の底より明るい張切った合宿が出来た。

今の本一が予科一で甘やかされてゐた夏の合宿の時に丁度戦地から帰られた掛さんに小言を喰ってから、掛さんと云へば何かピリッとする印象が残る。練習に来られると皆緊張する様な気がする。だが今度の合宿以来何か親しみと云ふか懐しい気持が出来た。此上は何時見えても此が俺達の練習だと平気で出せる練習を毎日やらねばならぬ。一先輩の出現如何で変る様な練習はだらしがなさすぎる。吾々は自分の力で自分のありったけを練習に投込まねばならない。技術にも体力にも他校に劣る吾々にとって其等を克服する途は此のみである。此の上に立って始めて蹴球部の栄える道がある。道は無限である。吾々は弱い者である。けれども吾々の若さと云ふ物を今一度振り返って其の若さから溢出る血潮を漲らして春こそは再び一部に是非とも帰らねばならぬ。

アンシンメトリー

本一　西内碩男

シーズン半ばに、慌しく諸先輩を次々と戦線に送り出し、それに伴って吾々も忽ちに進級し、責任はますます加重されてくる。そして、戦陣から諸先輩の活躍の様子と激励の便りを戴き、身の引きしまる思いの日々である。

この夏のシーズンオフに奥村が仙台に来た。あちこち二人で市内を廻ったが、そのうち、伊達正宗が、山形の小土豪から仙台平野に進出し六十二万石の雄藩となり、中央にウッ勃たる野心を

抱きながらそれを果せぬと知ると秀吉、家康との関係を巧みに乗り切って、その雄藩としての地位を固め、内政、外交、経済に手腕を振った、その政宗の霊廟瑞宝殿に詣でた時、彼は、その建築様式がアンシンメトリー（左右対象でない）なところに政宗の屈折した野心の現はれがあると、興味をもったようである。世の中の現実の姿はアンシンメトリーなもので、思う通り、考えた通りにならないのが常で、そのため理想としては逆にシンメトリーなものに憧れるが、現実とはあくまでそのやうなもので、そこに、政宗の乱世に生きる現実的な強い信念が窺へるのである。

人生とは何ぞや　ー己とは何かー

この命題は私にとって解明できない課題である。しかし、何ものかを見出したいと強く望み、模索し、自分と戦い、何らかの足掛りを求め、探究し続けることこそ自分の信条としなければならない、と思っている。

だが、練習の中に只管に打込み、ボールを蹴りたいとの思いは、病気した私には出来ないのが現実である。

しかし、今度、委員長として瀬藤主将を助け、部をリードしなければならないことも、も一つ課せられた重い現実である。

「サブこそサッカー部の真髄である」

この先輩の教への意を体し、実践のなかで全力を尽さねばならぬと覚悟し、進む積りである。

入営に当りて

学部二年　金原　実

我々の入営迄あと一ケ月餘ではあるが、今更覚悟などを事新しく述べる必要はない。毎日の生活、部生活を通じて我々の精神は充分鍛へられてゐた筈である。先輩の築かれた伝統によって至らぬ自分がやっと此処迄辿り得たことを有難く感じ、又時には重圧と迄感ぜられた輝かしい伝統が征く日を目前に控へて今迄の部生活を省る時に本当に生々と、我々の中に生きてゐるのを感ずるのである。

去る十七日の夜の壮行会の席上、諸先輩より蹴球部の精神と軍隊の精神とは相通ずるものであると言はれた。滅私奉公とか、真摯敢闘とかは単なる観念ではない。我々は部生活を通じて之の様な精神の體得に努めた。勿論戦線に於て、敵の砲火に立向った時尚自分の弱さ醜さを痛感する事もあるであらう。然しその様な自己を見出した時、直ちにその身中の敵と戦ってそれを打破らねば止まぬ気魄は充分持ってゐる。不断の練習は必ずやその時物を言ふであらう。猛練習の成果を今こそ精神的にも肉體的にも発揮すべきである。

米山先輩の最後の日記に「自分は現在、忠孝一致の境地に達し得た」と書かれてあると聞きその確固たる信念に深く打たれた。部生活に徹し得た人なればこそかかる境地に迄達せられたのであらう。故米山先輩の事を考へる時全く未熟な自分ではあるが、今迄に掴み得た蹴球部精神で此の戦争を戦ひ抜く心算である。

シーズン・オフ

本二　太田賢三

今年の夏は外房州の興津へ海水浴へ行った。毎年海岸の一部屋を借りて家族の者が交替で行ってゐるのだが、今年はサッカー部の永倉、加藤、奥村がやって来て一諸に泳いだりして賑かであった。松浦の一家も町の宿屋で泊ってゐたので、ガンさんやガンさんの弟さんとも交歓することが出来て愉快であった。

興津は入江になってゐて外房としては割合波がおだやかであるので、我々は元気に任せて、随分沖の方迄泳いで行き、浜へ上って来ては甲羅干しをしたり、砂ダンゴを造って、割りっこをしたりして遊んだ。

水泳は総合的な運動で心臓や肺臓の機能を強化することが出来る。しかし瀬藤さんの説によると、スキーは脚を使ひ山を登ったり降りたりするので、サッカーをやる者にとって最も適当したスポーツであると云う。それで今年の暮も登山部の合宿に同行して乗鞍へ行くつもりである。夏は水泳、冬はスキーとやって居れば天下泰平であるが、迫り来る時局は長くこのやふな事を許さないやふにも思はれるので、やれる中は大いにやって体力を強化し、二部優勝を達成したいと思ふ。

昭和十七年十一月

ポツリポツリ

豫二　永倉真平

我々は、一日を笑ひと苦しみの中に過してゐる。而して、その笑ひは単なる笑ひのための笑ひではなくて、苦しみから結果として出て来た笑ひである。そして此の笑ひはどんなに我々を疲労から解放して呉れる事だらうか。

定められた時間に自分の力の限界迄出し尽くして練習して行く。その練習には、一片の笑ひの影さへ在ってはならない。我々の練習は何処迄も苦行である。苦行の中に在って真剣味が欠けて居るなら、苦行する価値は無い。

一日一日の練習に於て、自己を捨て切ったかどうか、昨日の自己と今日の自己との間に進歩があったかどうか、又さういう風に努力したかどうか、と反省に反省を繰り返し、昨日の反省は今日の原動力とならなければいけない。

一日を漠然と暮してはならぬ。若い者が、一切を抛げうって練習する以上、其処には何か一つの確固たる目的がなくてはならぬ。　その目的は各自によって精選せられた夫々の特徴を帯びた目的でなければならぬ。目的なき生活には、それは生活と云ふ名に値ひしないし、何等の生気も、躍動も、発展も見られない。

真剣に生活を堀り下げて行かうとする者には、必ずや希望と恐怖の相反する二つの心情があるだらうと思ふ。私は、今ボールに対して、何とも云はれぬ愛着の心と恐怖の念をもってゐる。ボールは生きてゐる。我々の手に依って生命の息吹きが脈打ち出す。ボールが生きてゐると云ふ事を知った時に、そしてその生命あるボールを利用して自分の思ふ儘に足で消化出来た時にその人は完全にボールと自分を一つに融合させる事が出来るのである。

ボールを自分のものとするには、ボールを可愛がってやらねばならぬ。ボールへの愛は、試合中には執着となって表はれ普段には風呂に入れて垢を落し、食物をやる事――ハケで泥を落して油を塗る事――となって表はれる。

日常の生活態度は、試合になってやはり顕著に出て来る。普段の練習で苦しむ者は試合になって、割合に楽な気分で戦へる。それだけ心にユトリがあるのである。心にユトリのない人はギッシリ詰った急行電車である。何時何処で蹉跌があるやも測り知れない。平凡が大切である事を知る人は非凡だと思ふ。目立つ事を好むのが情の趨く処。自然の理である。

而も人々は、其れが一場の儚なき幻影なる事を知らない。根本を凝視せよ。基礎を築け。而もそれは平凡な事かも知れぬ。が決して「平凡な」といって片附けらるべき問題ではない。足を怪我して、階段を一段〳〵ガッシリと踏み上って行く様に、蝸牛の歩みは遅くとも必ずや目的地に達するだらう。

雑感

豫二　奥村一郎

我々青年は常に第一義的なるものに対する欲求を持ってゐる。その欲求がなければ青年とは云へぬ。我々は生活も其他なんでもの基準を蹴球に置いてゐる。何故さうしてゐるか。

それは私のやうにスポーツが好きで漫然と入部した人間でも蹴球部の伝統にふれるにつけこれこそ自分にとって第一主義的なるものとして立派なものだと感じたからである。

そして又蹴球を第一義的なるものとして保って行くことは我々の務である。蹴球部に於て我々は常に裸体となる。どんなに偉らさうな言葉を云っても練習には自分の力だけしか発揮出来ないし試合の時は練習以上に巧く行くと云ふわけに行かない。その意味で試合は練習の総決算であると云ふ言葉を私はつくづく体験してゐる。試合の時練習の時と同じやうなミスをするのである。蹴球部には多くの名言が残されてゐる。しかしその言葉も初めはなるほどそんなものかと思ひながら真実にピッタリ来るものでない。それが次第に体験を通じて自分の胸に迫って来るやうな気がすると共に、自らの体験に依って言葉を産み出した先人の偉大さに感ぜざるを得ない。その言葉の中いつも言はれる「馬鹿になって球を蹴れ」よりも実行困難なものはない。この馬鹿と云ふのは一切の懐疑を擲って意志の権化となるやうなことを指すのであらう。

蹴球生活には苦みが伴ってゐる。肉体的苦みもあるし精神的苦みもある。精神的苦みとは学問と蹴球の問題のやうなものであるらしいが、私にはそのやうな問題に悩まなかったので分らないが、吉沢先輩が昔の部誌に理智的な探求には限界があると言はれてゐる。肉体的苦みは今迄短い間

ではあるが色々経て来て苦みの極限が次第に延長して来た。極限は体力と精神力に依って定まる。合宿に於て我々はその極限を自分で発見する事が出来る。合宿に比べれば毎日の練習は精々二時間内外の努力に過ぎない。然し合宿の時は生活が頗る単純で練習が第一の目的であるのに、毎日の練習の時はその外に色々の俗事を果さねばならない。そして心は何かと云訳をこしらへて、だらしなさを許さうとする。であるから毎日の練習を惰性に流れずに立派にやって行く位難かしい事はない。一日の練習を反省してみると、自分の妥協的な卑怯な態度、例へば此の間痛言された先輩の来た日丈張切ると云ふやうな態度がある。自分を弱い弱いと言ってゐるのは逃避である。強い人間に、意志の鞏固な人間にならう。蹴球よ蹴球部よ私を鍛えてくれ。

非思量§§

豫二　加藤春樹

私は今何も書きたくない。書くべき纒った想念が全くないのである。それがつひ先日、一月五日頃迄はあったし実際一つの原稿に纒めて置いたのである。そして意気込んで人にも話し、実際に行動して見た。その見解は大体次のやうなものであった。「部の実体とは何事にもあれ、一つの目標に向って真剣な生活をしやうとする雰囲気である。これは文化部も運動部も変りはない。しかし生活はその実行に当って必ず手段を必要とする。そして蹴球部の取った手段は則ち蹴球である。そして代々の主将が目標として掲げた所の『リーグ戦第一主義』とか『浦高戦』とか云ふやうな実際的なものから或ひは又『克つ』とか『粘り』とか云ふ抽象的な文句に至る迄、此等は全部窮極の目標に至る一手段であって、此れに徹底する事に依って窮極のもの、即ち昔から良く云はれる『精神的なもの』に達するのである。私は此の『精神的なもの』を定義して、何時でも従容として死ねるやうな心境を得る精神力、とした。そして此の一点に至ってこそ、蹴球は武士道、茶湯、禅、芸術と一致し得る、即ち取る手段に違っても窮極のものは一だと云ふ言葉が妥当する。これは餘りに目的論的なこぢつけかも知れないが、少くとも私はこれが真の部生活の辿る道ではないかと思ふ。そして今我々部員が取るべき態度は、日本人としての蹴球人が当然だ。」と。以上にやうに考へ、原稿を

書いた。然るに数日前禅の本を買って来て読んで見た。他に本を読んだり、考へたりしたところ、その原稿で喋々した事が、全く馬鹿らしく、見当違ひであるといふやうな気がして来て、原稿を破いてしまった。その本にはかう書いてあった。薬山和尚が坐禅して居ると一人の坊さんが尋ねて来た。『兀兀地思量箇什麼』（そんなに不動の姿勢で、一心に何を思量なされてゐるのか）『思量箇不思量底。』（この思量を絶したものを思量してゐるのだ）『不思量底、如何思量。』（既に思量を絶すと云ふものを、どうして思量すべきであらうか）薬山曰『非思量。』と。これを「思量に非ず」と「思量せず」と相対させて考へれば、一応理屈はつく、しかしそれが何だらう。只に知性の満足に過ぎない。悟りのやうな、私の目標とする絶体境とは全く異なる。そも〳〵その絶体境なるものが、客観的に有るものか主観的に造り出すものか。勿論禅者に聞いても両方とも否定されるだらうし、自分自身でもこのやうな論理的、分析的な思考が真の過程から外れてゐるらしいとは朧げ乍ら察せられる。それでは知性では解決出来ないなら直観か。なるほど、今迄色々考へたがそれが何か纒った想念となる瞬間は確かに直観に依るらしい。しかしそれに至る過程は真剣に考へてゐた積りだ。とすればやはり、普通云はれる思量が踏むべき過程なのか。ところが、そうやって得たものは時刻の経過するに従ひ単なる理屈である事が判明して来る。いくら考へてもどう〳〵巡りである。悟りとは無我の境地であるとも云はれる。私は元来運動神経の至極弛緩してゐる質であって人の目を見張らせるやうなプレーは数へる位しかない。此の数へられる少数のものも、他の名プレーヤーから見たら取るに足らぬものであって、私の自惚れかも知れないが、この数少いプレーの中に私は無我の境地ではないかと思ふものを強いてそう信じながら、拾ひ出して見たい。例へば、キーパーである私が最も悩まされたセーヴィングである。快感を覚える位に気持良く体が伸びて横に飛んだ時、私は実に不思議な気持を体験した。何も考へない。ボールを取らうとする考へすらない。まして試合に勝たうなぞといふ考へは毛頭ない。只私の体の中の何かが私の手を伸ばさせ、ボールをゴール外に叩き出してしまふ。その際相当なスピードで飛んでゐる筈のボールが高速度写真で映されてゐるかの如く、あり〳〵と見え、ゴール附近の人達の姿勢は愚か、顔の表情迄見える。見えると云ふよりも体全体に感じるのかも知れない。そして普段は

あんなに邪魔になり、私のプレーを拘束したゴールが、確かに私の心と関聯を持ちながらも（誇張された云ひ方かも知れないが）客観的に私の心とはなれて存在する。その時の気持は必死でもない、冷やかでもない。嬉しくもない。私は無我の境地とは此んな場合ではないかと想像する。或いは単なる神経の反射作用かも知れないが、それにしてはあまりに明瞭すぎる。或ひは此のやうなプレーを数多く経験された人は「そんなものが無我の境地だったら、悟りなぞはあまりに安っぽい」と否定されるかも知れない。しかし、私としてはどうもそう信じたいのである。それならば何故その状態が永続しないのか。一度絶体境に入った人は再び迷ふ事はないやうに云はれてゐる。ところが私はこの通り相も変らず、同一地点で足踏みしてゐる。快心のプレーをした人は皆此の気持を体験してゐるのだらうと思ふが、誰も私のやうに考へないらしい所を見れば、どうも私の楽天的な冀望に過ぎないかも知れない。私は実際空想家である。そして実際行動に至って逆に驚く程の臆病者である。その一つの実例として、前述の如く部生活の目標を理論的に組立てなければ、安心出来ないのである。自分の行為が何か満足出来る理論に依って裏打されなければ、実行出来ない。シュツルム・ウント・ドランクを説かれた事もあるが、到底駄目だ。『方向が正しくなければ如何に真剣な行為であっても、価値は無い』と云ふのが私の持論である。而も自分で正しいと信じた行為に徹底出来ないのが私の日常生活である。凡そ私の部生活は偽装で包まれてゐた。そして安価に感激する点が私の小人物たる真面目を表してゐる。いくら書いても愚痴に過ぎぬ。何か頼るもが欲しいと臆病な心が責め立てる。

しかし何時迄もかうしては居られない。入営は近い。本当に焦慮してゐるのが現状だ。部生活から何か纏ったものを掴みたい。私の経験した無我の境地にも解決を与へたい。それには烈しい、苦しい練習をやって見たい。そして軍隊生活にそれを延長し、第一線でボールの代りに弾丸が高速度写真で撮された如くに迫って来るのを見たら、絶体境の何者であるかが悟れるかも知れない。

附記　吉沢さんの下に提出する時に至って一読し、全く不満足な感を抱いた。例へばセーヴィングの箇所なぞ噴飯物である。練習のない時に只頭だけを働かして

作り上げた理屈であるから、不健全極まるものだ。しかしそのまゝ提出する。只軍隊生活だけを期待したい。

話の泉

練習も終っての帰り、いづれ口やかましい連中が例の如く電車につめこまれた。

ゴロチャン「此頃秤が足りないな二貫位の間上ったり、下ったりしてはかれないや。」

数人色の黒い奴等相槌を打つと、

アンヨ知ったかぶりで「君、四貫目位の錘りを持って乗って後で引けば良いぢゃないか。」

ゴロ「其もそうだな、成程オメエ頭が良いや。」と全然感心の様子、其処で頭の良いのがおせっかいに「あの分銅本当に四貫あると思ってやがら。」と云へば、皆ゴロチャンを見て電車中が笑ひ出した。併しあの時感心してゐたのはゴロチャンだけではなかった様だな。

感想三題

豫二　佐藤裕之

ペンをとってみるとさて何を書いたらよいやら、あれこれと迷って一向に進まぬ。纏った事は書くこと及びもつかぬ。兎角自分の感じた事考へてゐる事を素直に、思ひ出すまゝに綴らうと決心するとペンが少し許り進み出した。忘れもしない六月二八日、雨上りの帝大グランド我々はこゝで二部へ陥落したのだ。戦終った時、唯啞然として何一言も出なかった。涙一滴出ない。何故心から泣けなかったのか。どうして自分　一人だけ皆から離れて、この事実を眺めてゐたのか。その晩の会食の席上、村木さん始め本三の人達の流した部を愛する涙。僕はこれを見て実際驚いた。冷い感激性の少い自分のあの時の心にも、ひし〳〵と身に迫ってきて、目頭が熱くなった。自分なんか、本三の人達の気持の十分の一にも達してゐない、百分の一も理解してゐない、と考へ〳〵夜の電車に乗って帰った。どうも自分は全身をさらけ出して、感激にひたり難い、その勇気の無い人

間である。その癖自分一人になった時はさめ〳〵と泣けもし、感慨にふける哀れな人間である。人前で感泣することなど、自分を偽ってるんだと思はれてしようがなかった。然し自分がメンバーの一員として試合をした後は泣けもし、感激にひたれる自分の一面もある。之こそ自分の我儘だ。練習中の自分の態度にも、この我儘がひょい〳〵と頭をもたげる。その度毎にこれでは何らぬ〳〵と自分で自分を励し、直そう〳〵と努力してゐる。

× × ×

然し何はともあれ、蹴球は僕の心の灯である。一生の病つきかもしれぬ。蹴球なくてはその日〳〵の生甲斐を感じない。現在の部は部員こそ少いが、一家族の如き和気藹々とした雰囲気に包れてゐる。まことこゝに生きる者は幸福である。

× × ×

商大が二部に落ちた。何故か。経験浅き自分には明瞭に之れだとは言ひ切れぬ。然しその原因の底には微塵の如き本体の分らぬものが無数に押し合ってゐるかもしれない。乾酪の中で、いくら虫が動いても乾酪が元の位置にある間は気が付かないと同じ事で、我々は一部の商大蹴球部と言ふ大樹が倒れる迄、気が付かなかった何物かがあるのではなかったか。我々は、その一つ〳〵を見出して克服して、明日の一部復活へ進もう。若い未完成な我々だ。真実一路の旅なれど、真実、鈴ふり、思ひ出す。我々の進む道は多難だ。非常時の蹴球部を背負った自分達。事実やるのは自分達なのだ。口で他人が何と言はうと、何と励げまそうと、練習し試合し一部へ上るのは僕達だ。いくら口で言ひ健気な事を紙上に書いても致方ない。只実行あるのみ。蹴球一路、進まんのみ。

—十一月十三日夜—

※※※※※※※※※※
※※ 話の泉 ※※
※※※※※※※※※※

長閉なる小春日和の昼休。部室前に集って漫談に憂身を窶す予科の腕白共、不図サッカー部専用の合宿所の無い事に気がつき、建設計画を立てたです。

『温度は暑からず、寒からず。雨は多からず、少からず。風当りは強からず、弱からず……。』と勝手な熱を吹き、『特に食物の豊富たるべき事。』途端に声有り。

『川端の胃の腑を満足させ得る土地有りや?。』でオヂャン。

所感

豫一 高柳 晋

春の浦高戦に初出場して、それ迄にない辛い、苦しい練習を経験した。その結果は無惨に敗れてしまったけれども、この経験は生涯自分の脳裡を去らず、蹴球部に於ける最初の感激（負けた無念さの篭った）となって残るであらう。この試合は三年生にとって、最後の浦高戦であった。併も三年生は一度も勝った経験がないのである。長い歴史を持つ対浦高戦に一度の勝利も得ずして豫科を出られた三年生諸兄の残念さは、察するに餘りある。残された一年二年、特に我々一年生は僅か半歳にして、豫科の推進力であり、原動力であらねばならない立場に置かれた。人数の少い点を遺憾とするが、そんなものを克服して商大蹴球部を磐石の安きに置き、更に之を発展せしめるものは我々でなくてはならぬ。具体的に言へば、この秋の浦高戦に勝って、本科生を安心させ、来年の秋のリーグ戦には商大を二部から一部に押し上げるのが、我々の任務であるのだ。兎に角、目標は浦高打倒だ。先づ此奴からやっつけるのだ。

商大が二部に落ちた。此の事は我々の沈滞を意味するものか。我々は此の責任を負はねばならない。商大蹴球部を盛り上げるものは豫科であると言はれて来た。我々もそれを承知してゐる。併し単に承知してゐる丈で、少しも実際に盛り上がる力となっては現れて来なかった。「本科生に引づられるな」と屢々叫ばれたが、何の役にも立たず、終に「豫科生は骨抜きだ」と言はれる様になってしまった。こんな言葉に対して何もなし得ないのは餘りに残念である。気分的に、行動的に本科を引張って行って、来年の春には見事に優勝しようではないか。その事が豫科の張切りを現す最も良い方法だと思ふ。

此の秋の部の方針は個人プレイの充実にあるのだが、顧みて自分のプレイのなってゐない事を痛感する。こんな所に引掛りがあるので兎もすると引込み勝ちになってしまふ。此頃になってやっと、もっと積極的にならなければプレイは上達するものではないといふ事を悟った様な気がする。従来あまり自分はおとなしかった。これからはグランド上で精一杯荒れ廻らうと思ってゐる。蹴球はおとなしくては駄目だと言はれて来たが、自らを顧みるとどうも此の点が

うまく行ってない。その結果、元気が無い様に見えてしまふのであらう。其の他あらゆる点で、足らない所がありすぎる程だが、その為に引込思案になって、いぢけてしまはない様、自分の性質を矯め直すことに努力してゐる。

※※※※※※※※※※※※
話の泉
※※※※※※※※※※※※

三善、加藤、竹山と此処色の黒いのが続いてゐます。今度の合宿でブラックトリオを編成誰が№1だとか2だとか仲々騒がしい。

何処かの羽目板の前で消えちゃったり、夕闇迫る頃パンツも泥で汚れては、キーパーが居ないとフォワードを驚かせたり忍術使の様だ。

「黒い」と云ふ語が出ると先づ「俺は…」と否定にかゝるのが三善、上級生をしきりに立てようとするのが加藤、ロッカーの陰に消えて白い歯で僅かに存在を示す竹山、併し皆も泥がしみこんだ様な顔にならなくちゃ駄目だ。誰だ褌の色を見て呉れなんて云ふのは

＃　＃　＃

ボール

一年　加藤　省

我々は入部以来雨の日も風の日も、日曜日も一日を措んで練習を積んで来たが、此の球を未だにコントロールする事は出来ない。ドリブルするにも少しも思ふ様には動いて呉れず、少しでも油断すれば勝手な方へコロ〳〵と転って行ってしまふ。ロングキックの時等目標を定め、今度こそはと全力をこめてキックすればサイドに当って遙かに違った方に飛んで行ってしまふ。向ふから大きなフライが飛んで来て足下に落ちる。自分は早く球をおさへ様とするが徒に球にまはされる許りだ。全く未熟なうちは如何に頑張っても、如何にあせっても球を意志通り動かす事は出来ない。然し一度蹴球の奥儀に達すれば今迄如何にしても言ふ事を聞かなかった球が恰も人の意志才能を知尽して居る様に自由自由に動いて呉れるのである。我々は今迄此の球がある為、幾度球になかされ此の球がなかったらと思ったか知れない。その度に球は未熟な自分を嘲笑って勝手に何処かに

転って行く。全く余り思ふ様にならない時は、たゝきつぶしたくなる。然し一度試合になるとその様な気持は何処かに行ってしまひ、唯球をなで只管此の球が敵のゴールを割るのを願ふ様になるのは実に不思議な事である。球は練習の積んだ闘志にあふれた方に必ず味方し、こっちが練習不足だといくら頑張っても弾丸の様に味方のゴール向って飛んで来る。全く我々にはあの円い球が、人間の意志才能を知りつくした生き物としか思へないのである。あの球を如何に征服し、如何に操縦し球が我々に与へる試練に如何に耐へて行くかといふ所に蹴球の哲学が生れて来るのであらう。

今我々の部からも大部分の人が入営し、後に残った者は僅々九名となってしまった。練習中球を蹴るのにも淋しさが身に迫って来る。然し我々が生活の場として居るのが蹴球部である以上球を蹴る事に生き、又苦しんで行かねばならない。我々の同志も南海の涯北の戦線に敵を蹴散して蹴球の生活を送ってゐる。我々の同志はグランドから姿を消して行った。然し我々の生活は球がありグランドがある限り続けられなければならない。

「球は不思議なものだ」

◇☆◇ 感想 ◇☆◇

豫一　布谷由之

商大蹴球部に入ってボール一つ蹴れぬ中に半年過ぎ、此の間に感じた事は自分は蹴球部を通じて多少なりとも運動部生活を理解出来た事です。運動部即ち蹴球部とは自己の性格を知り、且つ表現する所です。此の点自分も恥しい次第です。

一期はバックのサブとして出来るだけの事はした積りですが、九月にキーパーの大命を受け、一月後の浦校戦を思ふ時、一方には今迄多少なりともやって来たバックへの未練と、又一方には一ケ月にキーパーとして自分がどれだけ出来るかと云ふ不安で断らうかと思ひました。キーパーとしての練習を始めると、何度やってもセイヴィングが出来ず熱心な他の人々への責任もあり泣きたくなったのも再三でした。何も出来なくてもよい唯セイヴィングさへ出来たら之が当時の唯一の望でした。さて試合になってみると、やはりセイヴィングが一度も出来ず、全く自分の拙技の為

惨敗し、実に先輩方々にも申訳ありません。
　自分の入部動機は真の運動部生活を味はひたかったのです。辛苦の中に喜びを求めて行く生活、自分は真に蹴球部を愛します。併し此の意義深い部生活の中で、チームワークは重大なるポジションを有して居ます。此の点から考へて、今日の六人の練習に対し疑問を禁じ得ない次第です。

話の泉

遂に我が愛する部室も文部省の御偉方の御目に留まる光栄に浴したです。
一日視学官殿が我が予科を視察の際、驚歎の声を発せられて曰く。『此れは汚い！。』

× × ×

共産主義の普及した結果、部員の所有観念が混乱したです。
川端氏血相変へて、
『金原さん、俺のパンツヲ持ってったろう。』
金原氏恐る〳〵、
『だけど、此れ俺のだぜ。』

× × ×

蹴球

豫一　鎌野俊明

　私は商大に入り始めて蹴球をやった。それ迄に友達から蹴球に就いて聞いてゐたが併しボールを蹴るのだといふこと以外には、ホーワードがインナーとウイングとセンターに分れてゐたりバックにハーフとフルバックとがあるといふことも、キーパーと役目も又オフサイドの意味も何も知らなかった。それでも、まあ何だか面白さうな運動だ位に考へて蹴球部に入った。最初は球を蹴る位大した技術なんか要らないんぢゃないか等考へてゐたがどうして〳〵仲々難しい。未だにインステップも正確に当ることは、もう本当に稀だ。そして足は痛くなるし「まめ」は幸に出来なかったがアンクルを痛めたりして随分消耗した。そして中学の頃迄には無かったことだが体が非常にだるい。併し一度パンツをはくと不思議に気分が爽快になり張切った気分になって来る。かくて上級生の指導により始めての試合、松高戦に出た。自分では

一生懸命にやるのだがプレイの拙いこと、ポジションのチェンジが上手く出来ぬので何と云ってお詫びをしたらよいのか全く恥づかしかった。
　之からも益々練習に精進するのみだ。私は蹴球を通じて精神的に何か得たいと思ってゐる。今迄のたった半年の部生活では何だか漠然としてゐる。それは予科を卒業して或は適令引下げにより、来年、二年で征くかも知れぬ。その時に或は社会に出てから始めて具体的に表はれて来るのでは無からうか。いや必ず私は蹴球の精神で戦ふ積りであります。

話の泉

昔男子ありけり。其のなせる褌、年来の逸物なりき。汗に浸り、泥にまみれ、股間を守る事数年。今は白妙の面も薄黒く、剰へ主の悪しき病にかゝり異臭漂ひ、且は風勢烈しきによりてか穴見ゆるに至る。厚顔の主も人見悪しとや思ひけん遂に暇をやりぬ。さて読める。

　白妙の仕ふる道は変るとも
　　褌となるな末の末迄

然るに哀れにも白子と云へる新たなる物召使ひにけり。名にふさはしき清き性なり。一日常の如く主思はず取りはづせば餘りの臭さに堪えかねけんパンツの裾よりひらひらと逃げのびたりあさましき事にこそ。

所感

豫一　茂木淳四郎

　敬愛する諸兄が征かれる。覚悟はしてゐたものゝ、一沫の寂寞感を如何ともする事が出来ない。
　自分でも嫌悪を感じる程の心の弱さから、ともすれば落伍せんとしつつも、兎に角、此処までついて来られたのは、ひとへに蹴球部諸兄の御鞭撻のお蔭だと思ってゐる。今にして思ふに、肉体的苦しさの故に、幾度逃避を企てた事か。そしてその度毎に、生活の不満から蹴球部に舞ひ戻った自分であった。そして逃げ腰になりつゝも、何時の間にか蹴球部を離れられない者となってゐたので

あった。

しかしそんな積極性を欠いた生活から、何ら有意義な結果が生れて来やう筈はない。まして此の激しい移り変りをする世の中では、餘程積極的な、しっかりした生活態度を持って居ないと、押し流され、全く無意義な生活を送るやうになって了ふ。

部の上級生が自分を引っぱって行って下さる間は、それ程感じなかったが、いざ上級生が征かれて、たよるべき者は天にも地にも自分独り、自主的生活（？）をせねばならなくなった時、此の事が痛感された。「他人の事ぢゃ無い、自分自身の事だ」。と云ふ言葉が実感されるのである。

今だに生活の場を見出し得なかった自分を恥づると共に、今後の部生活に期待をいだくものである。

……　……　今部誌を読んで見ると、諸先輩の部に対する並々ならぬ愛情、自己の全生活を打ち込んだ信頼が、はっきりと、うかゞはれる。まだ其処まで行きつけない、到らぬ自分を思って赤面する次第である。

出征諸兄の武運長久を祈りつゝ

昭和十八年十一月二十九日夜

×　×　×

所感

豫一　床宿健美

何も書くことはありません。

唯々、部員の方々の真面目な愛部心に一日でも早く追ひつきたいと思ふのみです。

蹴球に理屈はありません。幸にして吾がサッカー部には意気があります。熱があります。若さがあります。

グラウンドは明るい。そこには一点の邪気をも含まない。のです。そこには吾々のみが愛著を感ずるのです。真紅のユニホーム――それは燃ゆる熱と意気との象徴です。

部員は一生懸命なのです。

吾がサッカー部は闘ってゐるのです。

二十余名、一つになって闘ってゐるのです。

＃　＃　＃　＃　＃　＃　＃　＃

感想

豫一　岡本悦吉

私が商大豫科に憧れの入学をして蹴球部が非常にいゝ部である事を聞いて、学生生活の精神的中心を求めて入部してから、早くも半歳餘の月日が立ってしまった。入部当初蹴球といふのは足で球を蹴るのだらう位に考へ試合一つ見た事のなかった私が、今兎に角球が蹴れる様になった過ぎ去った月日を顧る時、限りない上級生の恩愛に頭の下る思がするのである。西内さんに手に取る様にボールドの前でキックやストップを教へてもらひ、リーグ戦が二部顚落に終り、それから始めて私達の練習が始まり浦高戦が惨敗に帰して一期は終った。その間何かと口実をつけて休んだり三年生に随分迷惑をかけたものだった。一期はうかうかと丸で夢の様に過ぎてしまった。私はまだ春の浦高戦にも出なかったものだから、心は締らずだら〳〵と月日を送ってしまった。夏休になって私達が父とも兄とも思ってゐた本三の人々が卒業され、豫科三の豫科の中心の人々が本科に昇格されると、蹴球部は丸で火の消えた様な淋しさで、殊に豫科は一年と二年だけになって、始めて之ではうか〳〵とはしてゐられないと責任の重大な事をひしひしと身に感じたのであった。九月の合宿、生れて始めての合宿は私に何等かの意味で一劃期をなした。清々しい秋の大気を吸って規則正しい生活をやり午前と午後激しい練習をやり腹はよくすいて飯が腹一ぱい美味しく食べられるし和気靄々の夜の娯楽の楽しさも経験して身体も急に強くなった様な気がするし気分も楽しいし、合宿って何ていゝものだらうと思った。それがすむと現実に目の前に豫科リーグがやって来て、試合に始めて出場出来る様になって嬉しい様な恐しい様な気分で第一戦は相当張切ったのだった。そしてコーナーキックのゴール前の混乱時で取るに足らぬものなのだが一点生れて始めて入れる事が出来て、何とも言へぬいゝ気分にひたったのも束の間、三戦とも惨敗の憂目にあってこれではいけないと考へ出したのである。合宿から第一戦にかけての張切りも、第二戦第三戦になるにつれて煙の様に解けてしまって、声も出ないしするどい動きもしないいつも球が出た後でばかり走ってゐるといふ様な全くだらしない試合振りになってしまった。

未だ何一つ充分には出来ない。私の前途は長い。兎にも角にも球が蹴れる様になって、試合にも出られる様になったのは、今迄の蹴球部生活のおかげである。もう一つつき進んで精神的に何物かを得ようとして私は今もがき苦しんでゐる。幾度か何か得た様に思ったが又煙の様に消えてしまふのである。たった半年餘で蹴球が分るものではない。兎に角球が蹴れる様になった事を満足して、僅かではあるが伸びて行く進歩に喜びを感じながら前途はるかな蹴球部生活を楽しみと期待と努力とを以て続けて行く積りである。

❀現在の心境❀❀❀

豫一　松岡忠治

変な縁でサッカー部に入って十箇月に垂んとしている。その間の自分の部生活をふり返って見るに、一期にはクラスチャンを漕いだり一月あまり病気で練習を休んだりして本当にサッカー部員としての自覚を持つに至ったのは二期になってからだと言ってよい。

病気で豫科浦高戦後の会合の雰囲気を味へなかった自分は本科卒業生の送別会の時に始めて商大蹴球部伝統の雰囲気を経験した。部員不足等のあらゆるハンディキャップを克服して来春必ず一部昇進を先輩並びに新卒業生の前に誓ふ在校部員、それを激励しいたわる先輩新卒業生達のやさしい中に力のこもった言葉等深く感銘に残った。その感激をそのまゝ持続しての翌日からの一週間の合宿、自分は途中で足を痛めて満足な練習は出来なかったけれども、その間に部員の和かな親睦ぶりを見、毎日来ては激励してくれたり共に汗ビッショリになりながら練習してくれる先輩を見た。そして来春一部に昇進する根底を築かうと努力する上級生達のはげしい意力を実感した。合宿が終って痛めた足の為にしばらく練習を休んでゐる中に、いつしかサッカー部に対して一期には殆ど無いと言ってよい愛着と言ったやうなものを感じるやうになった自分を見出し、対専修戦に於て合宿以来の猛練習にもかゝはらず惨敗する様を見ては今迄の自分の上級生からひきづられた練習を深く愧ぢて、一日も早くなほって練習に出たいという気が強く起った。豫科リーグを惨敗に次ぐ惨敗でやうやく終へたけれども商

大蹴球部はくじけはしない。練習又練習、反省又反省、商大蹴球部は来春のリーグ戦を目指して歯をくひしばって進む。未だ〳〵いつも上級生からひきづられ通しだが上級生の歯のくひしばり方に決して負けまい。上級生から言われるまゝに指示される通りに男らしく真面目に動いて行かう。関東選手権大会の緒戦である対千葉医大戦の時に見物してゐた某大学生が「往年の商大の面影ないなあ」と言う言葉を僕はすぐ側で聞いて「畜生！何を！」と思った。確かに今春のリーグ戦に於ける二部転落は何等かの商大蹴球部の欠点を暴露してゐるかも知れないが、今や我々は緊褌一番あらゆる困難を克服してその大学生が言った「往年の商大蹴球部の面影」を取戻すべく努力してゐるのだ。しかし色々な状態から見て来春の一部昇進は決して容易な事ではあるまい。これから練習は益々猛烈に上級生の指導は愈々峻烈になるだらうが本当に積極的にこれに応じて行き商大蹴球部員としての責務を完全に果す事に努めやう。

未だ〳〵未熟ではあるが、この前村木さんが言われたやうに部が向上の軌道に乗ったやうな感じがしない事もない。来春の輝かしい希望に張切って明るい気持でレギュラーの人を助けつゝ一筋に練習に精進して行かう。

＃＃部生活の回顧＃＃

豫一　竹山誠一

私は此の一片を自分の今までの部生活の反省したい。或る程度既に悩みを抜け切ってゐる現在の私として、一期の己を語るのは何んとなく厭はしい事であるが、自己の反省の為にも、又同じ様な悩みを持つ一年生に何等かの参考になるであらう。

中学時代の私は本を読む事が好きだった。受験勉強の暇々に文庫を読んだり、図書館へ行って小説を読むのが楽しみである。「上級学校へ入れば本が読める。」といふ望みも私の受験の底を流れるものであった。

さて、豫科に入って私の生活にも一大変化が起った。教へられ導かれた生活より、自分で学び、自分の意志によって自分を律する生活に入った。その時にあたって寮上級生から聞く言葉は、「中学校の殻を破れ」。「個性を見出せ」「本を読め」。といふ事であった。

最後の言葉は特に私に取って、好ましげに響いた。魅惑

的だった。私は自分の今後の生活を考へるとひとりでにほゝえましくなった。それ故、私は本を買った。本を読んだ。そして考へた。自分の将来について、又自分の生活について、当時に於て私が部員の一人であるといふ事を考へてゐたか、又寮生活についてと同様に部生活について考へたか、私は「否」と云はないまでも疑問を懐くのである。

然しながら練習が軌道に乗って来るに従って、練習の疲労や時間の不足から、私生活がだん〳〵と隅の方へ押し縮められた。そこに於て私の文化部的な生活と部生活とは対立し悩みを生じたのである。本が厭になって来る日もあった。練習が厭になって来る日もあった。両方とも厭になって、何も手につかず、一日を考へ過した日もあった。部と本とどちらを君は愛すかと聞かれた時、私はきっと「本だ」と答へたであらう。更に寮生のチブス発生が私を更に〳〵部生活から離れた所に押しやって了った。私は暗い気持で夏休みを迎えた。夏休みを限りに部を止めやうと考へた事も幾度だったか。

夏休みを淋しい寮で考へ抜いた。練習を離れた生活に於て始めて練習に対し、部に対し愛著を持った。合宿に於てそれは更に拍車をかけられた。一期の私は弱かった。自己に対して甘かった。

今や私の心は俄雨の去った青空の如きものである。私の今の気持も短的に云ひあらはせば、部生活を、練習を享楽したいの一言に尽きると思ふ。練習の醍醐味がわかりかけた様な気がする。春の浦高戦に於ける私は惨めだった。私は今春の雪辱の焔に燃えたってゐる。部に於ける生活は今や私の全生活の基準である。根柢である。部生活の一員としての寮生。部生活の一員としての読書。私の生活信条とも云ふべきものは確固としてゐる。

部の諸兄よ、どうか私をたゝいて下さい。そして私を踏み固めて下さい。

（終）

感想

豫二　高柳　晋

学徒として多数の部員が勇躍出陣されて、我が蹴球部も従来の様な充実した練習が出来難くなった。人数が今の通りに減ると華やかな昔に比べて聊か淋しくならざるを得ない。併し我々は蹴球部をしっかり守って行くと堅く誓ったのである。蹴球精神を擁へ之を発展せしめるには激しい練習に如くは無いとは自明の事である。だが時勢の圧迫は練習を毎日続けて行く事を許さない情況であるが、我々は許された限りの時間を誠心を篭めて蹴球に向けようと覚悟してゐるのである。此の様に逼迫した時局の中で尚も練習を続け得る幸を思ひ、時到らば事有らば先輩に続いて銃を把って出る覚悟がなければならない。

我々の蹴球はボールを蹴る事そのものが目的であるのではない。それは只だ手段であるかも知れない。然しボールは我々にとって唯一の手段である。他の手段を以て代用せしむる事は出来ない。若しボールを蹴る事が出来なくなれば最早蹴球部は存在しないと云って良い。従来の蹴球部の団結を地盤として生活して来た者に取っては今回の学徒出陣に依り部の変貌がなされねばならない事は大きな痛手であらう。我が部の将来には大きな困難が横たはって居る。或は一大転換をせねばならない事になるかも知れない。兎に角自分の考へるには嘗っての蹴球部は無くなって了ったのだ。光輝ある伝統を持つ、充実せる生活を続けて来た蹴球部、自分がその中に居る事を最も誇りとした蹴球部は事実上消滅したのだ。従って商大蹴球部の精神を僅に伝へ得るのは今の一年生を最後とする。九月より新たに出発した部は恰も蹴球部草創の時代を思はせるのである。少い人数でボールドに向って一生懸命ボールを蹴ってゐる姿はさういふ気分を起させる。新学期に新らしい一年生を迎へて出発する部は全く異った環境に置かれるのではないかと思ふ。

自分が云はゞ何の気なしに商大蹴球部に入って二年になるが、その学校内部に於ける地位を見るや、その生活態度の真剣なる事又は部員の結束の堅き事等最も優秀な部であると自らも誇り他も亦たそれを認めて来た。そして先輩が皆殆んど我が部に対して激しい愛情を持ってゐる事を知り、驚異の感に打たれたが然し幾分かはその気持も分る様な気

がしてゐた。自分も何か蹴球部から得て一人前になった様な気になってゐたのに上級生の指導が無くなって来ると自分の無力がつく〳〵と感ぜられ、如何に上級生が偉らかったかゞ、痛感されるのである。今後の我々としては、蹴球部の精神を、具体的には何とでも云へるが然しはっきり云へない此の気持をすべての部面に現はして行かねばならないと思ふ。

昭和十八年秋　　以上

思ひ出すまゝに ＃＃

川端良三

部誌の原稿〆切当日より既に数日を過ぎた今日漸くペンを取ったものゝ、いざ書くとなると例に依って例の如く下らぬ事しか頭に浮んで来ない。仕方が無いから思ひ出すまゝになぐり書きしてゐたら結局こんなものが出来てしまった。

「おーい川端石鹸が無いか」「知らねーよ」てな具合で元来小生は石鹸の要らぬ人間である。それは兎も角として練習后の風呂はいゝものである。生来小生は風呂が好きでシーズンオフになっても、二日に一回は必ず風呂に入る。併し練習后の風呂は又格別だ。あったまって来るといゝ気持になってよく佐渡おけさなんかが口に上って来る。「佐渡へ〳〵と草木も靡く、佐渡は良いか住み良いか」〳〵歌で知られた佐渡ヶ嶋、寄せては返す浪の音……、歌が何時の間にやら浪花節に変ってしまふ。その時には今日一日の生活の反省もなければ、明日に対する予想もない。何らの束バクもなければ又邪念もない。唯気持がいゝのである。何とも云へないのんびりしたいゝ気持である。湯気がボーっとあたりをこめ、肉体は暖いお湯の感触に包まれる。暫くは心地よい陶粋にひたりながら風呂につかってゐると時々河童が来て足をさらって行く。サッカー部にも育の悪いのがゐるから油断出来ない。――――

風呂から上って帰路に着く。雲一つない晩秋の空には今晩も亦無数の星が静かな青白い光を放ってゐる。〳〵義理の片割れ月夜の鴉、泣いて呉れるなお前が泣けば、背中の勘坊目を覚ます。　清浄な空を見上げながら浪花節を唸るのも恐らくは小生のみの知る喜びであらう。「識らず〳〵天上の清浄さに打たれ、身心共に清められ、俗事一切は脳

裏より葬り去られてしまふ。」と云ひ度いところだが、折も折練習后で腹ペコなんだから星を見れば金平糖を思ひ出し、月を見れば饅頭を思ひ出す。まさか、そこ迄食ひ辛棒な奴もあるまいが、兎に角一刻も早く飯にありつき度いのは　小生のみならん哉である。実際人間なんてものは、萬物の霊長だなんて偉張ってはゐるが、その実食気色気はた亦名利に汲々云ってゐるんだから、その心たるや全く汚い。どこまでも俺達は天上界の如き清浄な心になり切れぬところがあるのだ。

× × ×

入部以来月日は流れ〳〵てはや二年目の秋のシーズンも終りに近づき、終末を飾る浦高戦も目セウにせまってゐる。もう部生活の三分の一は夢の如く過ぎ去ってしまったのだ。今静かに考へて見ると、入部以来今日迄の自分の部生活は案外平易な過程ではなかったらうか。勿論今迄に幾度もつらいと思うた事もあった。併しそれは結局自分の気の弱さと愛部心の欠如からであった。然しながら自分はそのつらさを卒直に受け入れてゐて別に部生活に対して峻烈な批判を加へて見る事もしなかったのである。そしてつらいなりにも部生活を続けて行かうと単純に決めてゐたのである。

この単純性のあった事が僕の今迄の部生活を案外平易な過程たらしめた由因であらうと思ふ。現在依然として自分の愛部心は稀薄ではあるが、幸ひ何らの危惧もなく逡巡もなく毎日の練習に臨む事の出来るのを嬉しく思ってゐる次第である。

戦　　績

昭和１６年

秋の三商大戦は時局柄中止

（合宿）

9/5 対明大練習マッチ　0－0　0－0　1－0　で敗る　居川　太田　古賀　鈴木　村木　瀬藤　安田　山田　片山　土屋　桜井

9/7 対文理大　〃　0－2

9/13 対帝大練習マッチ　0－2　0－1　永倉

リーグ戦

9/28 対帝大（神宮外苑）　0－0　0－0　引分　居川　松浦　太田　瀬藤　村木　鈴木　土屋　片山　松岡　山本

村木氏前半終り蹴られて負傷後半フォワード４人　ガンさん居川氏奮斗して引分る。

10/4 対慶応（神宮外苑）　1－0　0－2　惜敗　居川　瀬藤　太田　古賀　松浦　鈴木　山本　松岡　片山　土屋　永倉

前半土屋ヘッディングシュート，後半コーナーキックきめられタイムアップ寸前もう一点入れらる。

10/19 対早大　0－2　0－2　惨敗

グランド昨夜の雨で湿り，終始押されて敗れる。

10/25 対文理大（神宮）　1－0　1－0　終始攻勢

11/2 対立大（日吉）　0－0　0－0

12/13 浦高戦　0－0　0－1　タイムアップ寸前コーナーキックのもみ合いで１点入れられる。

（12/6 より剣道場に合宿せど）

昭和１７年

4/12 対慶応練習マッチ　2－0　0－1　で勝つ　（日吉）

4/19 対明大　〃　0－1　1－0　で引分　（八幡山）

春季リーグ戦

4/29 対早大（神宮）　4－1　0－1　前半１点先取され永倉のシュートで追いつき更に永倉２点きめ，コーナーキック敵キーパーのミスで１点，後半コーナーキックで１点返さる。

5/17 対帝大（一高）　0－3　0－2　完敗（小雨）

5/23 対慶応（神宮）　0－3　0－2　完敗　居川　水島　宮沢　鷲野　村木　太田　永倉　瀬藤　土屋　安田　山本

6/6 対立教　1－0　0－1

6/21 対明治　1－3　0－1

6/26 二部入替戦

対立教（帝大）　0－0　0－2　雷雨　五郎病み上り，後半水島脚吊り，村木も足痛めて後５，６分で崩れる。

7/11 浦高戦（浦和）　0－0　0－3

三商大戦 7/20 対神戸　0－0　0－0

7/21 対大阪　0－0　0－1

予科リーグ

10/4 対専修　3－7　完敗　加藤　金原　竹山　高柳　川端　松浦　高橋　永倉　奥村　岡本

10/10 対慶応　0－5　完敗（日吉）　佐藤

10/15 対早大　0－4　（東伏見）　高橋

11/8 対文理大練習マッチ（小平）4－4引分　加藤　鷲野　竹山　瀬藤　川端　松浦　永倉　土屋　安田　奥村

関東綜合選手権大会

11/15	対千葉医大	2－2 2－1	（日医大）	辛勝
11/22	対上智大	1－0 4－1	（帝大）	
11/23	対早大（準決勝）	1－5 0－2	（帝大）	
12/5	浦高戦	1－0 0－0	（小平）	佐藤のロングシュートで前半きめる。

佐藤 永倉 土屋 安田 奥村
瀬藤 川端 松浦
鷲野 太田
加藤
田中 永倉 佐藤 岡本 奥村
高柳 川端 松岡
床宿 竹山
加藤

昭和１８年

4/25	対明大練習マッチ（八幡山）	1－3 3－0		で逆転勝ち

綜　合　戦

5/2	対法政	4－0 3－0	（小平）	楽勝
5/15	対農大	3－1 1－0	（小平）	気迫では敗る
5/23	対工業大	3－1 2－0	（元住吉農大グランド）	
6/12	浦高戦	0－0 0－1	（浦和）	
7/8	予科対一高練習マッチ	1－1 1－2	（一高グランド）惜敗	
9/19	予科対松高　〃	0－0 0－1		
10/15	浦高戦	0－3で敗る（浦和）		
10/17	対早大戦	1－4 0－3	で敗る（東伏見）	

永倉 瀬藤 土屋 安田 奥村
高柳 松浦 金原
鷲野 太田
加藤
田渕 永倉 佐藤 林 奥村
高柳 川端 松岡
床宿 加藤（弟）
加藤
渡辺 林 中西 鎌野 小島
茂木 森 高柳
加藤 床宿
布谷

名簿

卒業年度	氏名	区分	住所	電話番号
明治三二年	男爵（名誉会員 貴族院議員）深尾隆太郎		東京都杉並区上荻窪二ノ五五	荻窪四七三五
大正一三年	北尾義人	勤先	大阪商船Co遠洋課	
		自宅	兵庫県武原郡大村南川端六八九	

大正一四年	進藤静太郎	自宅	大阪府東区淡路町三ノ二一	五六七八
		自営	会社　進藤商店	一〇二九
大正一五年	松本正雄	自宅	東京都杉並区大宮前五丁目二八七	荻窪五二八六
		勤先	京橋区銀座西一丁目実業ビル五階 松本法律事務所	京橋六〇八六
	川村通	自宅	東京都世田ヶ谷区東玉川町二	田園調布二八三五
昭和二年	高橋朝次郎	自宅	神奈川県鎌倉市乱橋材木座一一六五	
		勤先	キリンビール株式会社東京支店長	京橋六一二一
	明石毅	自宅	大阪府豊能郡南豊島村原田四一三	
		勤先	大阪市北区南扇町五 大阪ガス株式会社　経理部長	南　一八〇
	猪瀬弁一郎	自宅	東京都杉並区馬橋一ノ三七	
		勤先	株式会社藤田組取締役	
昭和二年	三宅弘方	勤先	日本油脂株式会社海南島出張所東北営業部	
		自宅	東京都芝区田村町一ノ二 日本油脂株式会社農林部気付	

昭和四年	瀬社家力	自宅	小石川区小日向台町一ノ六四	
		勤先	日本ピストリング株式会社総務部長	
昭和五年	渡辺甚吉（貴族院議院）	自宅	東京都港区白金三光町二七三	
		勤先	有隣生命保険株式会社社長	
	城島鎮雄	自宅	豊島区長崎仲町二ノ三六五八	
		勤先	高速航空工業株式会社社長	
	伊藤健吉	自宅		
		勤先		
	森緑	自宅	名古屋市千種区田代町宇岩谷六	
		勤先	名古屋市港区稲永新田宇ヨ六七五 金城工業株式会社	
昭和六年	豊田達吉	自宅	杉並区西高井戸一ノ一二〇	
		勤先	大日本油脂株式会社	浪花一一一一

昭和六年	平松宣夫	自宅	麹町区紀尾井町六	
		勤先	株式会社三越本店	
	津田弘精	自宅	区戸塚町三ク九二九	牛込三一三二
		勤先	三井物産株式会社穀物油脂部	
昭和七年	西川善一	自宅	新京市東公路五〇七	
		勤先	満州国新京 満州炭鉱株式会社　調度課長	
	高橋啓二郎	自宅	豊島区巣鴨二ノ二二	
		勤先	昭和石油株式会社	丸ノ内一一〇七
	高橋重弥	自宅	茨城県水戸市元白金町西四谷九七九	
		勤先		
	清水元章	自宅	本郷区湯島天神町一ノ八六	下谷八五六
		勤先	明治生命保険株式会社水戸支店長	
	小林昌一	自宅	東京都京橋区京橋三ノ二	
		勤先	大森区馬込町西田四ノ二五 片倉製糸株式会社	
昭和八年	西田嘉兵衛	自宅	麹町区一番町一五ノ六	
		勤先	日本橋区横山町七ノ一 西田嘉兵衛商店社長	九段四六四四

昭和八年	勝田一郎	自宅	赤坂区表町二ノ一一	
		勤先	麹町区内幸町一ノ三 庄川水力電気Co	
	橋本林三	自宅	世田ヶ谷区玉川奥沢三ノ二七七	
		勤先	福島県好間村 古河鉱業株式会社　好間工業所	
昭和九年	吉村豊三	自宅	世田ヶ谷区代田一ノ六五　二ノ一	
		勤先	株式会社高田商会（丸ノ内）	丸ノ内 一三二一—五
昭和十年	二階堂謹司	自宅	広島県大竹町	
		勤先	マライ・イポー市トムソン路五一号 三菱商事	
	後藤博基	勤先	大連市山県通一六五 三菱商事大連支店	
		自宅	東京都赤坂区青山南町六ノ三	青山六四一二
昭和十一年	水島茂	自宅	杉並区荻窪二丁目二三五深海方	
		勤先	東京都麹町区丸ノ内二丁目一〇　三菱商事	丸ノ内 四三六一
	神野光司	自宅	品川区五反田六丁目九一	大崎一五一二
		勤先	日本橋区富江町五八　神野商店	浪花一二五三
昭和十二年	浅枝彦二郎	自宅	広島市広瀬元町二三一ノ一	広島五八一

昭和十二年	田島輝重	自宅	目黒区上目黒八ノ六六五	
	角田昇		熊本市西部第十六班部隊本部精密機械統制会考査部	
	森田昭之	自宅	小石川区林町一六	
			北京市車総布胡同22号三井鉱山会館内	
昭和十三年	枝村藤三郎		小石川区高田老松町五四	
	鈴木彰	勤先	神奈川県片瀬町一八二六	
	大掛隆久	自宅	北京市内二区絨線胡同六六日本鉱業北京出張所	
			豊島区堀之内町三ノ三	
	浅田英暉	勤先	昭南市ラッフルス・スク　ヤコイスビル四階	
			三菱商事	
	重見敏之		高雄州屏東市竹園町六〇	
			名古屋市昭和区桜山町三ノ五八	
	林田毅		長崎県島原町釣鐘町	
	村井恒典		世田ヶ谷区玉川奥沢二ノ五四七	
			中華民国北京市東城西総布胡同三〇号	
			三井物産北京支店	
昭和十四年	後藤虎雄	自宅	平塚市新宿七〇九	田園調布二六九〇

	岩崎寛貞		栃木県晃町清滝六一〇紫明寮内	
	小西正夫	自宅	中野区大和町一一三	
			広島県尾道市台町	
昭和十五年	二階堂晴三		広島県大竹町五三二ノ三	
			南支派遣波第八一二部隊（けい）主計　尉	
	池尾隆二	自宅	千葉市神明町三五四	
			北支派遣東第二九二五部隊主計少尉	
	菅瀬十朗		小石川区久堅町七四	
			ビルマ派遣第二九二五部隊主計少尉	
	狩森正雄		府下吉祥寺五六七	吉祥寺四一八
			満州国牡丹江省東寧牡丹江第八軍事郵便局気付第二六四三部隊	
昭和十六年	金井雄吾		神戸市灘区篠原本町一ノ三二	
			中支派遣第二三二七部隊岩崎隊	
	堀尾貞一		杉並区上荻窪一ノ二二	荻窪四一二一
	高橋道太郎		小石川区指ヶ谷町二	

昭和十六年	荒川守之助	栃木県宇都宮市大町一二二		宇都宮二三二三
		満州国竜工省ハルビン満州第八五〇部隊本部付主計少尉		大塚七九三一
	昇野広太郎	小石川区丸山町一一		
	吉田富彦	神戸市灘区高羽楠丘一〇八		
	石割知之	杉並区高円寺三ノ二一八		
	清水睦美	渋谷区円山町三		
		仏印派遣討第四二三四部隊太田隊		
	吉澤貞雄	長野県飯田市知久町二		
		東京都北多摩郡府中町陸軍燃料廠会計部		
		都下谷保村国立　西野広方	下宿先	
昭和十七年	鈴木英二	杉並区馬橋二ノ一七〇		中野二七七三
		宇都宮市宇都宮師団司令部計算科		
	片山光夫	広島市河原町九		
		浜田市西部第三部隊梨田隊		
	松岡義彦	渋谷区栄通一ノ三五		渋谷三七四五
		市川市東部第七四部隊伊隊		

昭和十八年	折下章	杉並区清水町二〇〇		
		満州国牡丹江第十二軍事郵便局気付満州第一〇一三部隊　陸軍少尉		
	山本孝次	杉並区荻窪二ノ一二八		
	茂木利幸	千葉県東葛飾郡野田町中台二一二		
	藤塚良策	神田区五軒町四八		
		東京都千歳郵便局気付東部一九〇三部隊（光）		
	居川達一	台湾基隆市寿町三ノ五		
		高雄海軍航空隊士官室		
	水島行	浜松市名残町三六〇		
		静岡市中部第三部隊見習士官		
	村木杉太郎	都下吉祥寺二七二九		
		横須賀局気付軍艦朝風主計中尉		
		長野県埴科郡西条村三七五一		
	宮沢力	金沢市東部第五十一部隊炭谷隊		

山田久寧	福岡県小倉市上富野四〇一	
潤上明	八王市市万町一三八	
青木育郎	渋谷区千駄ヶ谷一ノ五六二	
瀬藤俊雄	世田ヶ谷区北沢四ノ五〇三	
土屋五郎	浦和市高砂町四ノ一六五	
太田賢二	南支派遣軍鳳第八九七二部隊本多隊	
白島義夫	小石川区指ヶ谷町一三七	
山地鴻	杉並区阿佐ヶ谷四ノ四五四	
鷲野和夫	静岡県浜松市外中部第九十七部隊稲葉隊遠藤班	
安田与三郎	神戸市灘区八幡町二ノ六五	
	大阪府豊中市春日通二丁目八	豊中　三九六
	茨城県稲敷郡土浦海軍航空隊予備学生隊第十二分隊第五班	
	大森区雪ヶ谷町八六八	
	鹿児島海軍航空隊第二一一分隊第六班	
	横須賀局気付軍艦八雲（呉局気付ウ一〇五、ウ一〇一四板橋部隊山田隊）	

昭和十九年

西田碩男	仙台市南町通一〇	
松浦巌	東京都渋谷区代々木初台町四七五	
助川実	名古屋市東区元柳原町三ノ八ノ一	
荒川正三郎	深川区木場四ノ二ノ一〇	
	北支派遣甲一八七〇部隊鶴野隊二	
高橋三善	北海道　岩内郡御鉾内町六五	
	旭川市北部第二部隊東隊左隊	
永倉真平		
佐藤祐之	千葉県千葉郡二宮町薬園台東部軍教育隊戸崎隊	
川端良三	旭川市北部歩兵第三部隊菊田隊	
床宿健美	比島派遣暁六一四二部隊大久保隊	
林基徳	大竹海兵団第二七五分隊第十一教班	
	旅順海軍予備学生教育隊第五分隊生徒	
中西保雄	関東州旅順市旅順海軍予備学生教育隊第二分隊生徒	

昭和二一年

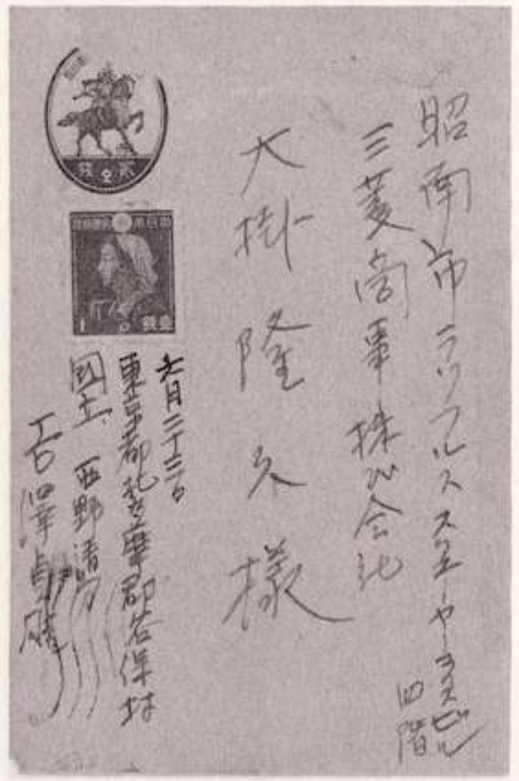
	昭和十五問	荒井倪夫	荒井倪夫	千葉県市川市国府台第七十三部隊呂隊
	昭和十四専	渡辺健	渡辺健	鳥取市中部第四十七部隊岩谷　隊
		新井秀男	森　一美	静岡市中部第三部隊梅隊五班
			金原　実	埼玉県入間郡所沢町元幸町二一
				南支派遣鳳第八九六四部隊上野部隊陸軍主計中尉
				神戸市須磨区大手町三ノ二六

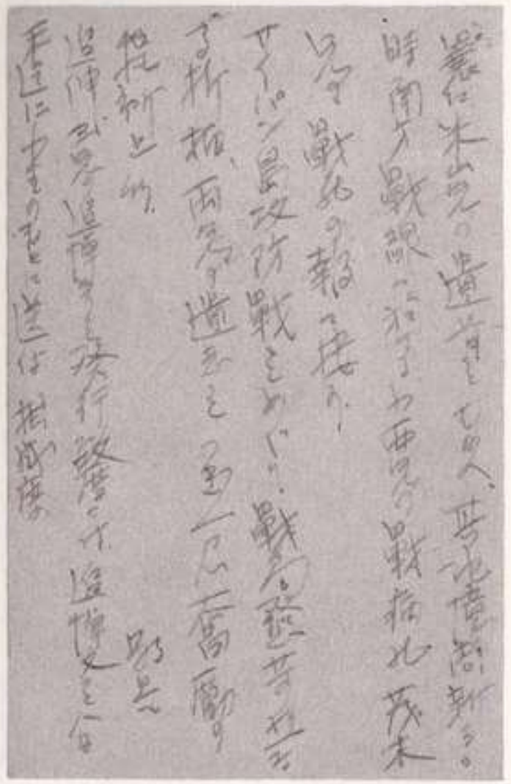
蹴球部々員名簿（三月十日現在）

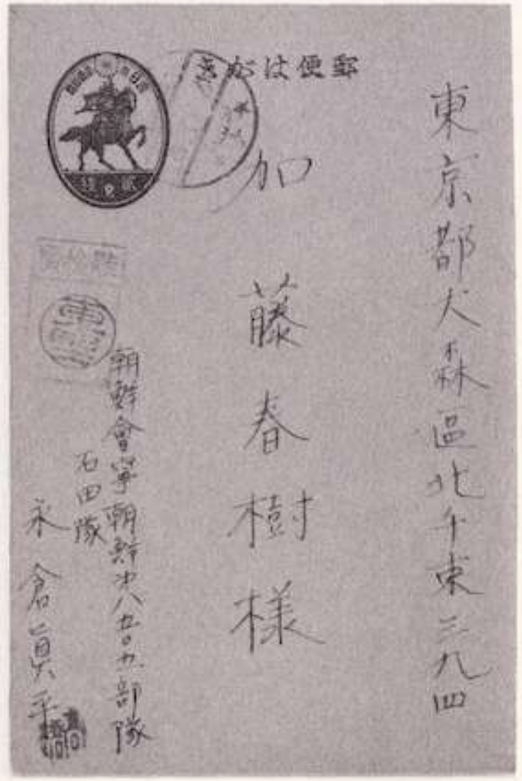
渕上　明	本科三年	八王子市萬町一三八	
青木育郎	本科三年	渋谷区千駄ヶ谷一ノ五六二（青山一八〇五）	
加藤春樹	本科一年	大森区北千束町三九四	
奥村一郎	本科一年	品川区上大崎四ノ二二八	
高柳　晋	予科二年	荒川区日暮里町三ノ二八二三（根岸二〇四二）	四月ヨリ寮ニ残留スル筈
布谷由之	予科一年	大森区北千束町六一七	
加藤　省	予科一年	大森区北千束町三九四	同　右
小島寿	予科一年	横浜市中区本牧三ノ谷一三七	同　右
大河内拓夫	予科一年	赤坂区青山高木町一二ノ三	同　右
坂井十郎	予科一年	千葉県君津郡君津町坂田一ノ五八五	同　右
茂木淳四郎	予科一年	千葉県東葛飾郡野田町中ノ台二一二	
鎌野俊明	予科一年	杉並区松庵北町九八	

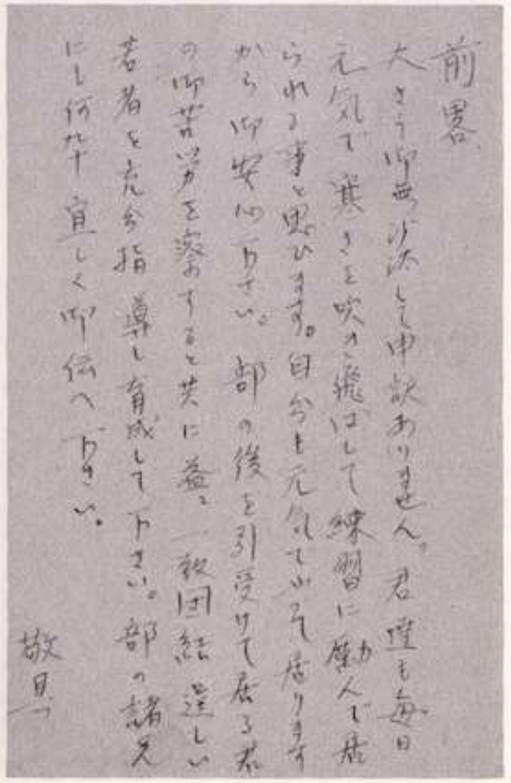
以上　十二名

四月ニテ予科生ハ進級　本科ハソノ儘。
寮残留者ハ寮ノ部屋数不明ノ為或ヒハ変更アルカモ知レズ。
入営中の部員の部隊名は目下問合はせてゐますから少し待って下さい。









郵便はがき

東京都
大森区北千束町三九四
加藤春樹様
（山形市七日町）
西内敬男

郵便はがき

東京都大森区
北千束町三九四
加藤春樹様

12/11
静岡市中部第二部隊移隊五班
金原寅

郵便はがき

東京都大森区北千束町三九四
加藤春樹様

12.16
千葉縣東葛飾郡富勢村
手賀第八十部隊西班隊
加藤裕之

郵便はがき

東京都下北多摩郡國立
東京商科大學武蔵野部
加藤春樹様

検閲済

静岡市中部第二部隊移隊五班
金原寅

拝復
入營以來御無沙汰致し申譯ありません。
急に部員の少くなった蹴球部を背負うて
色々と心勞も多い事と思ひますが、在京の諸先
輩と連絡を採り傳統を守って行かれんことを
祈ります。
軍隊生活は諸先輩がよく語られた様に蹴球部の
精神と一脈似たものがあります。どうぞ相變らず
元気と暮して居ります。
部誌を樂しみにして居ります。
天軍万歲 部員諸兄に宜敷くお傳へ下さい。

拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行
拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行

拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行

拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行

拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行

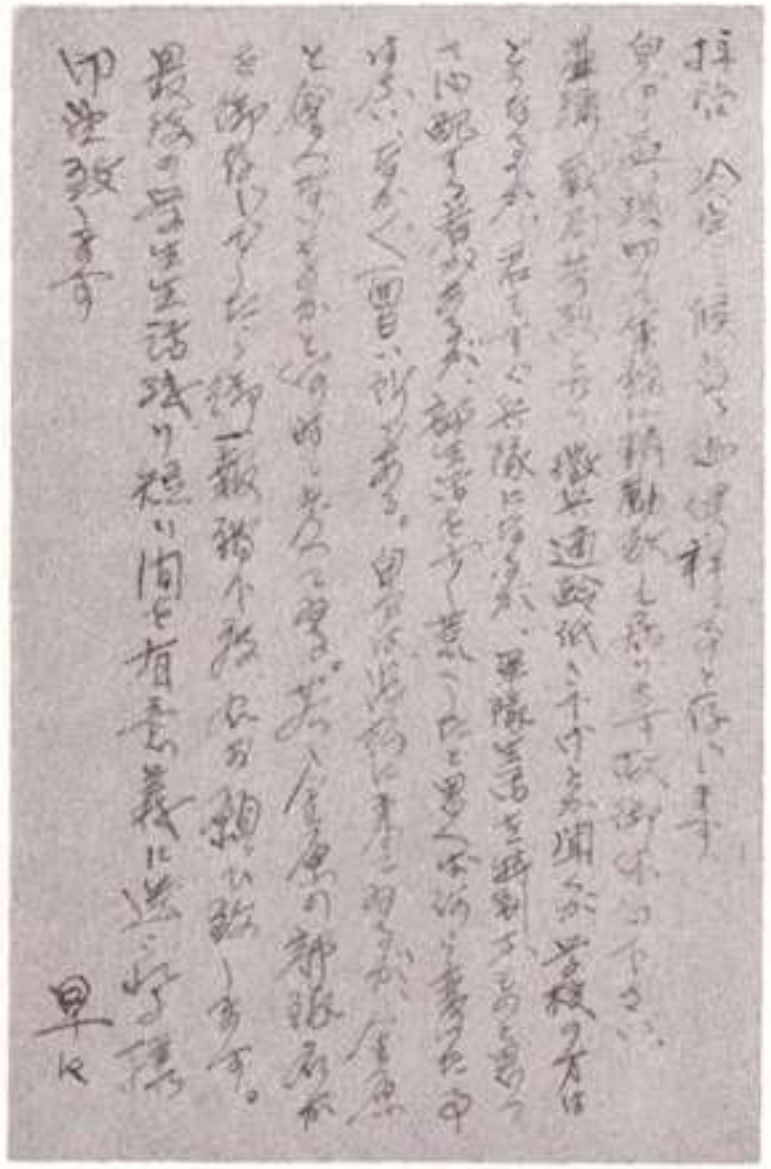
拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行

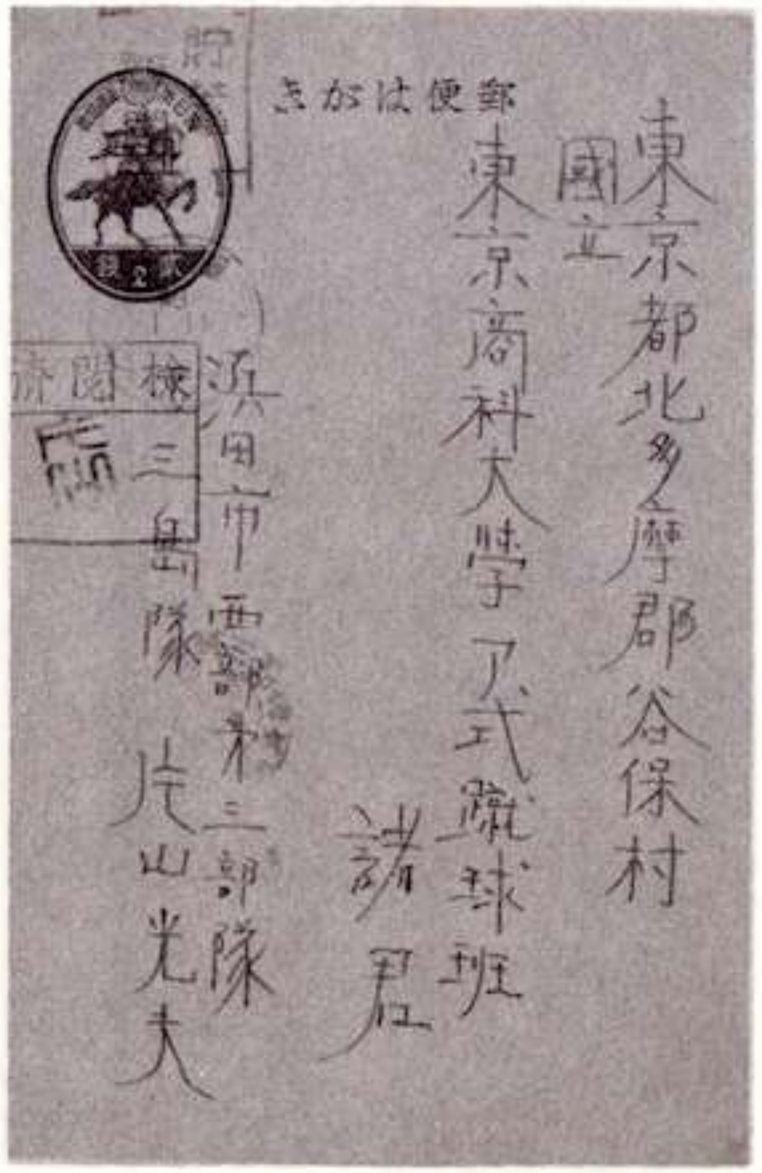
拝啓
入隊以來御無沙汰致し申譯ありません。
部員諸兄は相變らず元気で
活躍を續けられ
東京の時間も長い事と思ひます。
軍隊生活は
精神
動静
動静
命令
行

郵便はがき

東京都大森区北千束町
三九四
加藤春樹兄

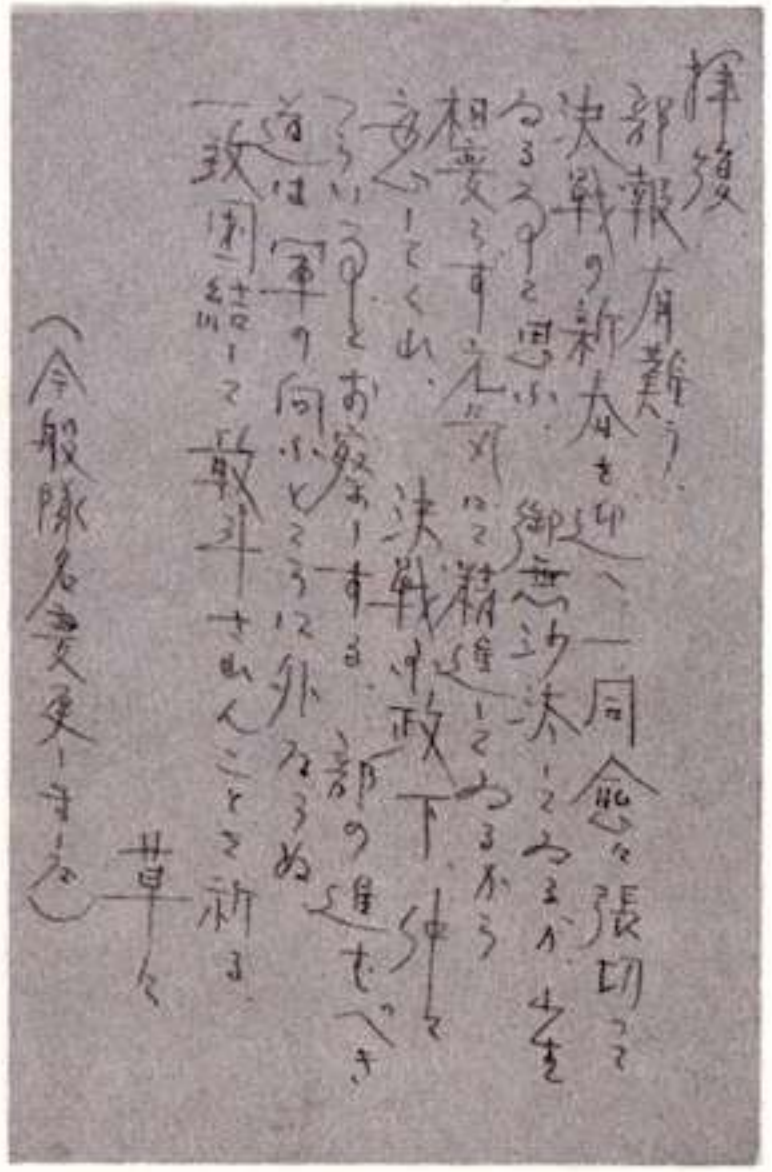
中部第十七部隊
稲葉隊遠藤班
太田賢三

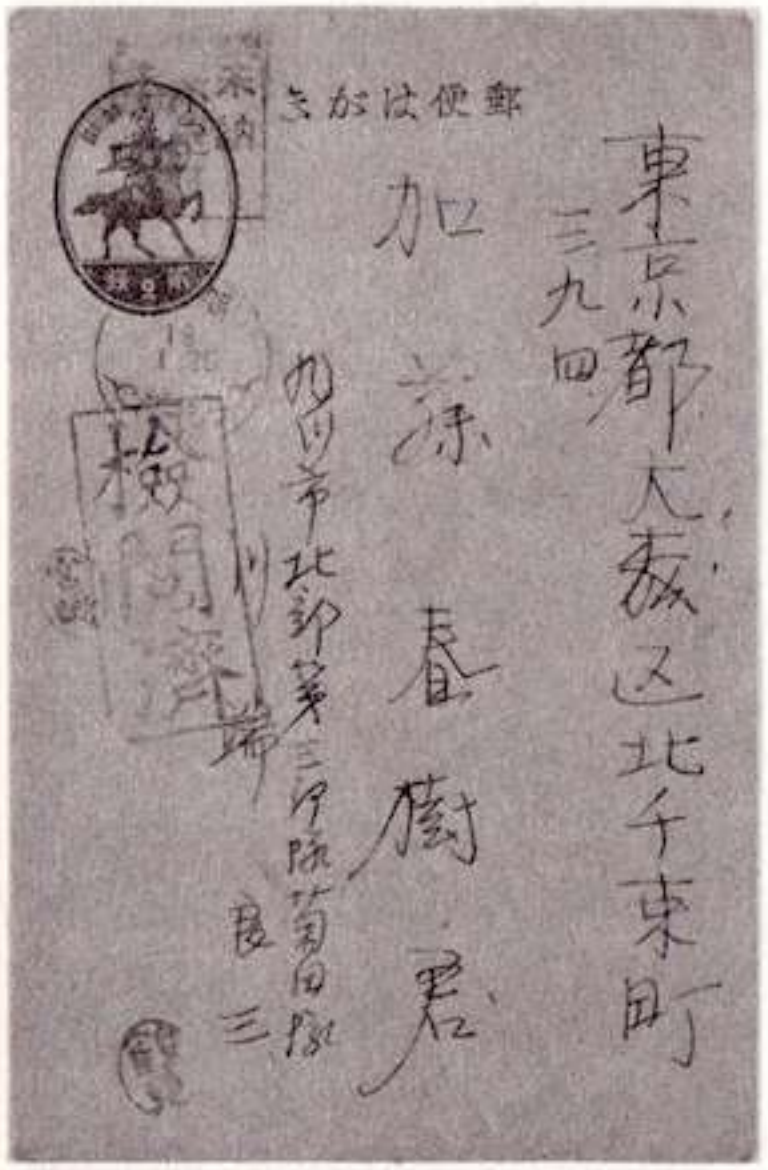

拝啓 [illegible]
[illegible]
最後の学生生活残り短い間を有意義に送られ[illegible]
切望致します
早々


郵便はがき

東京都北多摩郡谷保村
国立
東京商科大学ア式蹴球班
諸君

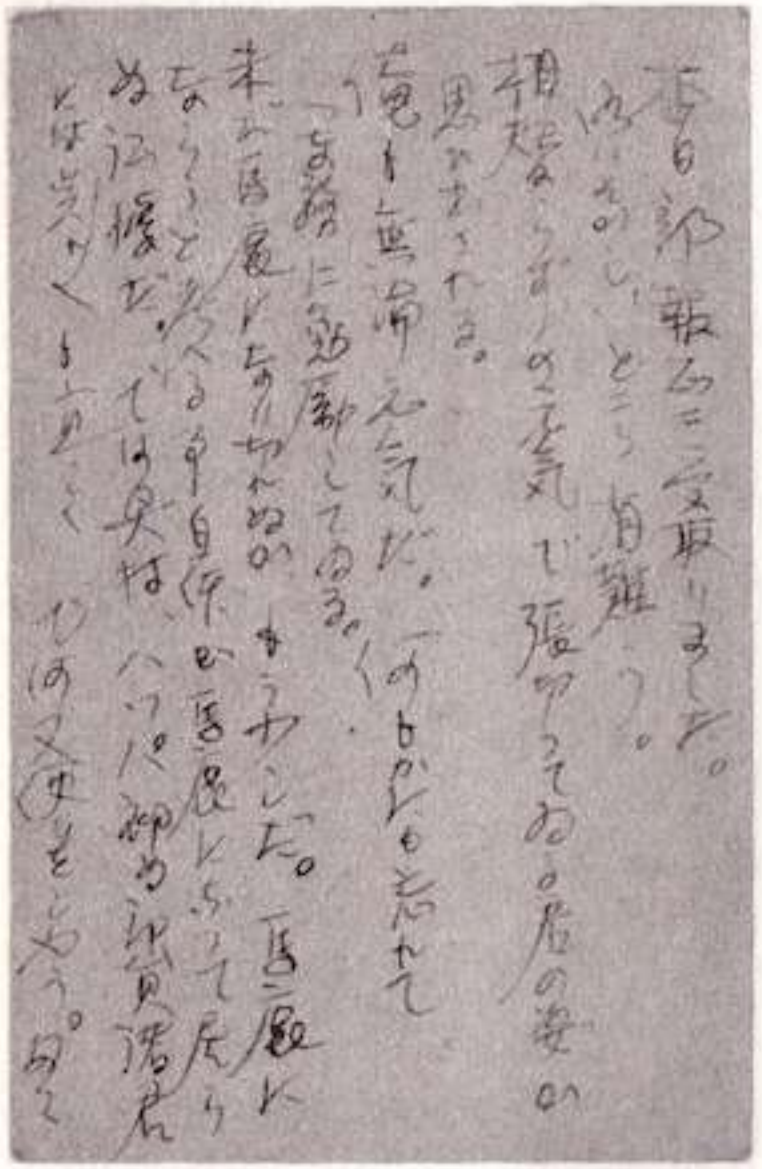
浜田市西部第三部隊
島隊
片山光夫

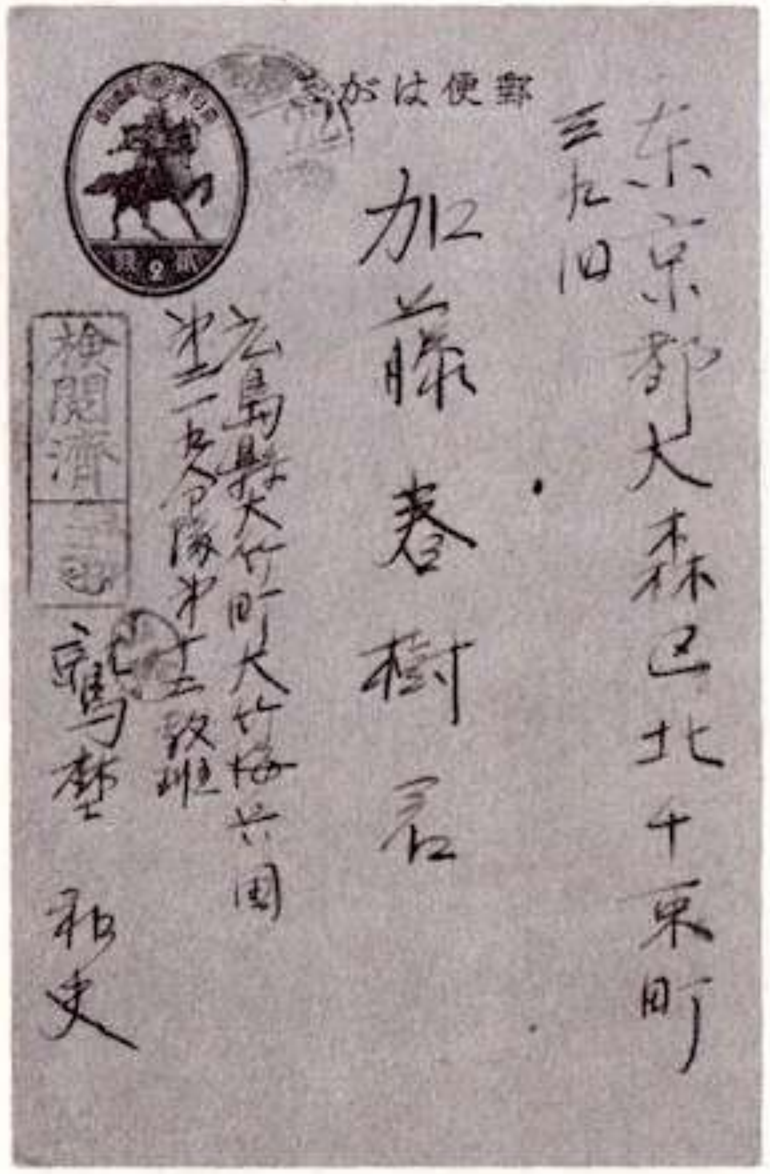

拝復
部報有難う。
決戦の新春を迎へ一同愈々張切って
居ることと思ふ。御無沙汰して居るが
相変らず元気にて精進して居るから
安心してくれ。決戦下伸びて行くべき
道は軍の向ふところに外ならぬ。部の
一致団結して敢斗されんことを祈る。
草々
（今般隊名変更しました）


郵便はがき

東京都大森区北千束町
三九四
加藤春樹君

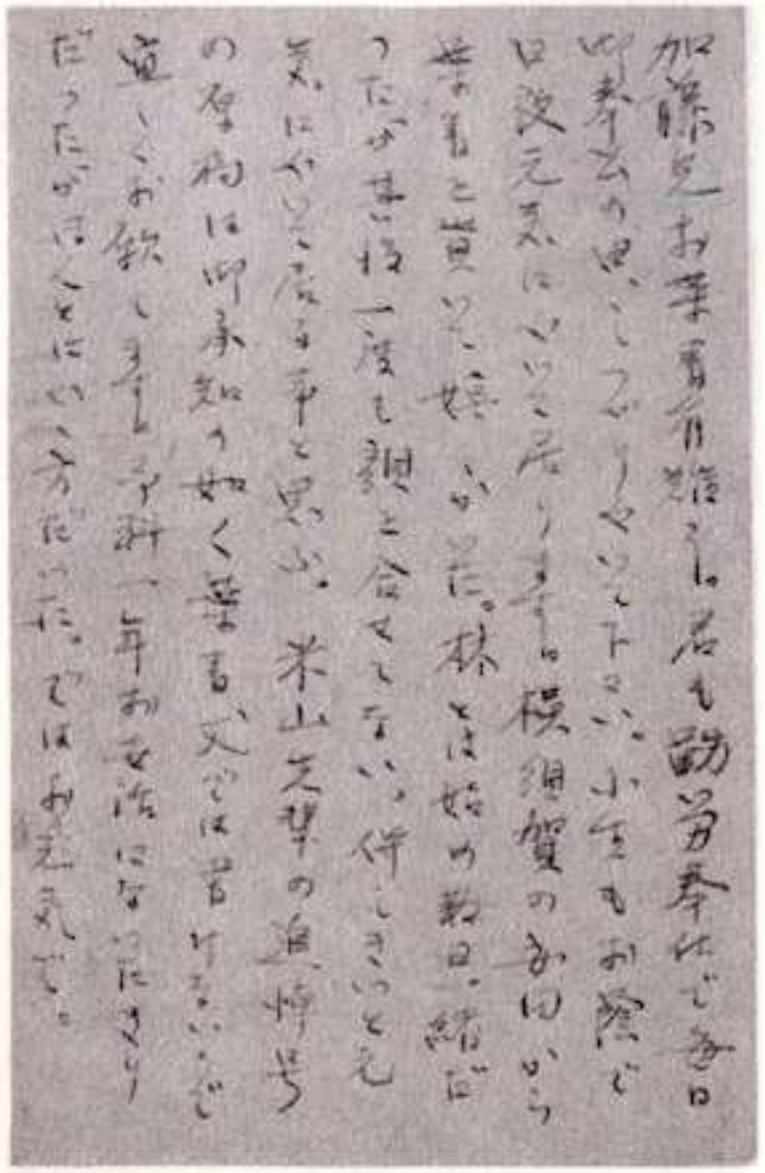
四日市市北郊第三〇部隊菊田隊
良三

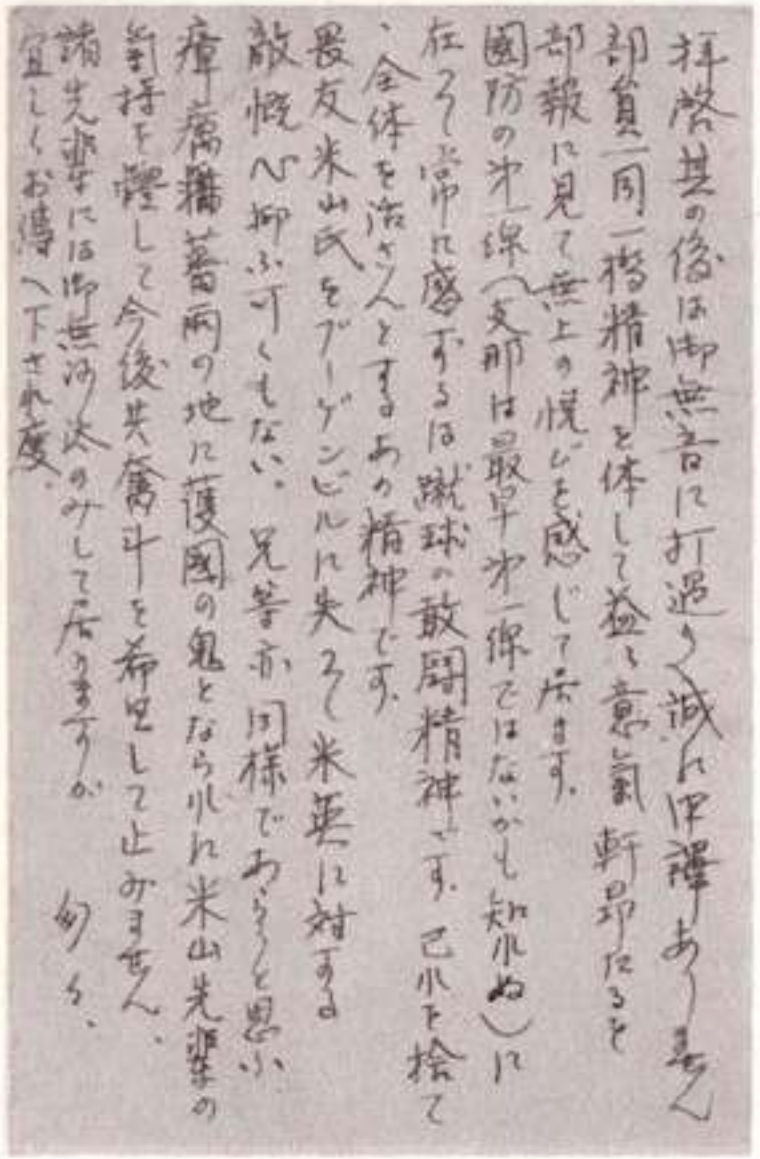

本日部報を受取りました。
何よりも嬉しい。どうも有難う。
相変らずの元気で張切って居る皆の姿の
思はされる。
俺も無事元気だ。一日たりとも忘れて
[illegible]

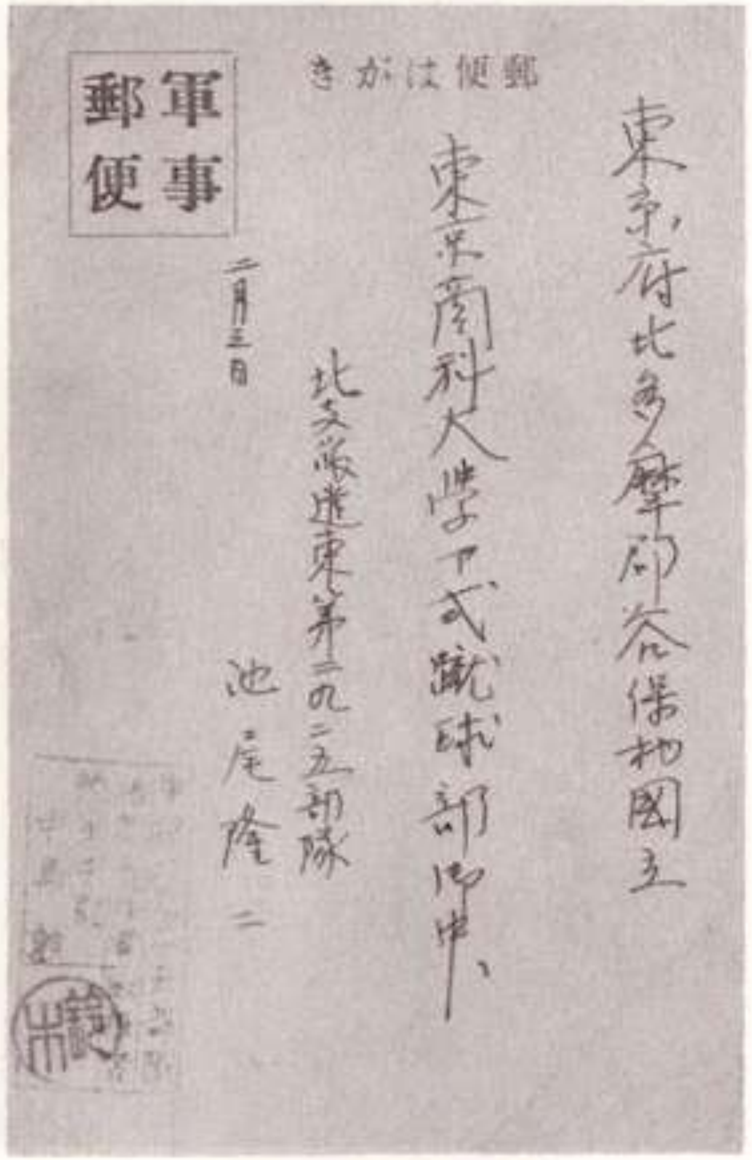

郵便はがき

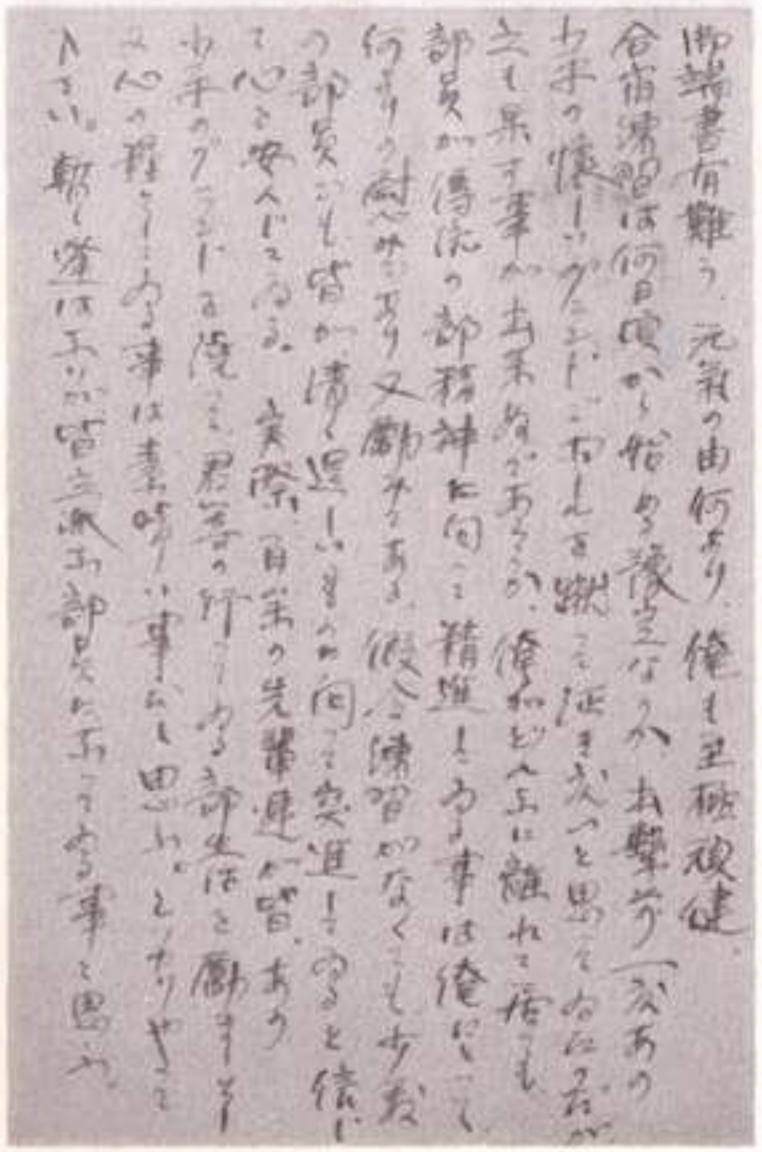
東京都大森区北千束町
三九四
加藤春樹君

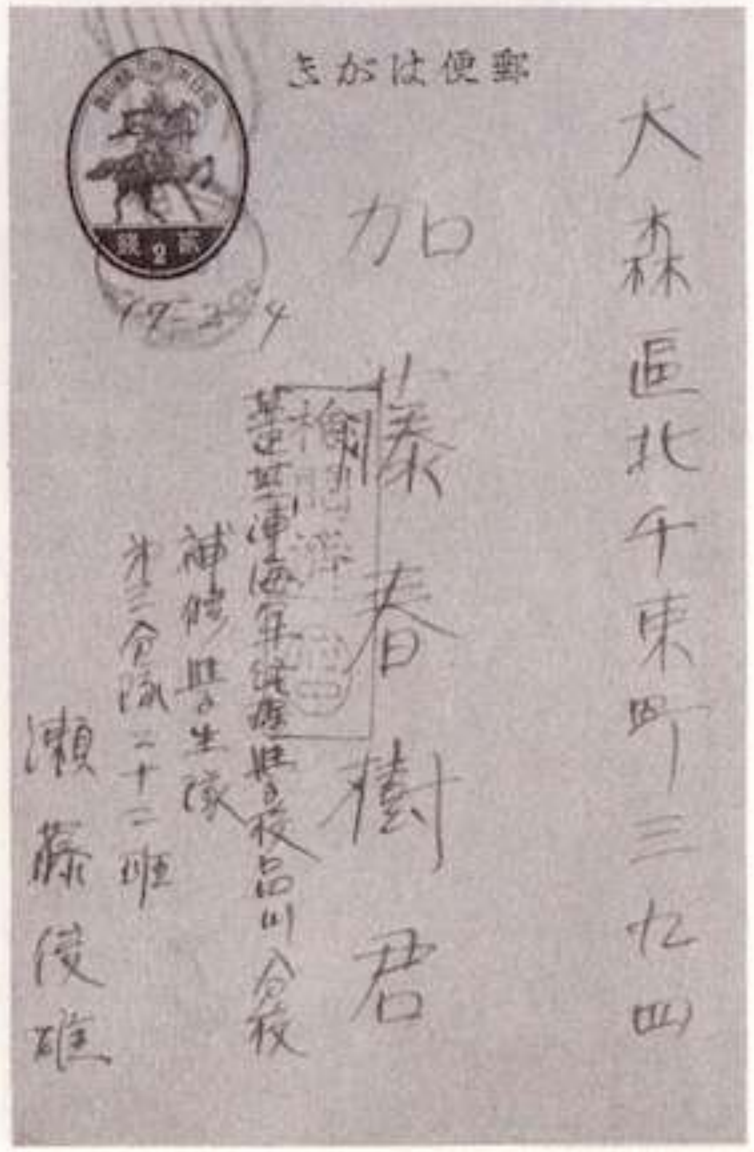
広島県大竹町大竹海兵団
第二一分隊第十五教班
鶴埜和史

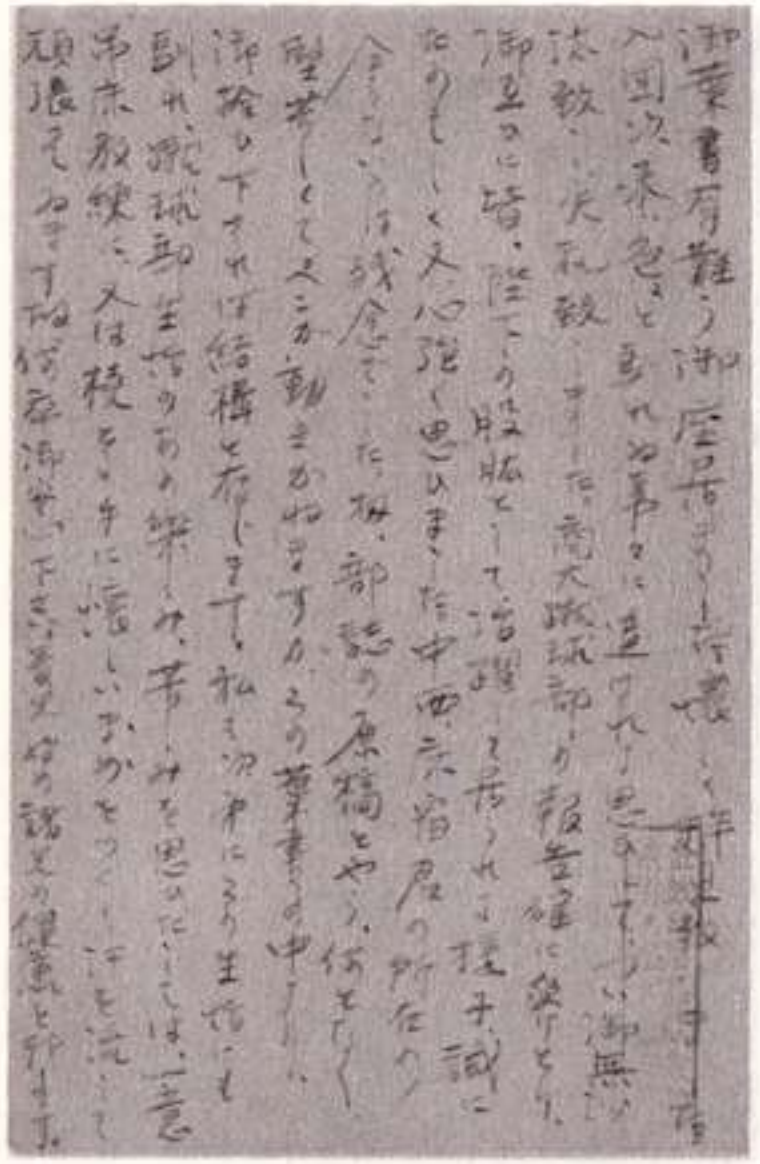

加藤兄 お手紙有難う。君も勤労奉仕で毎日
御奉公の事、しっかりやって下さい。小生もお蔭で
日々元気にやって居ります。横須賀の頃から
[illegible]

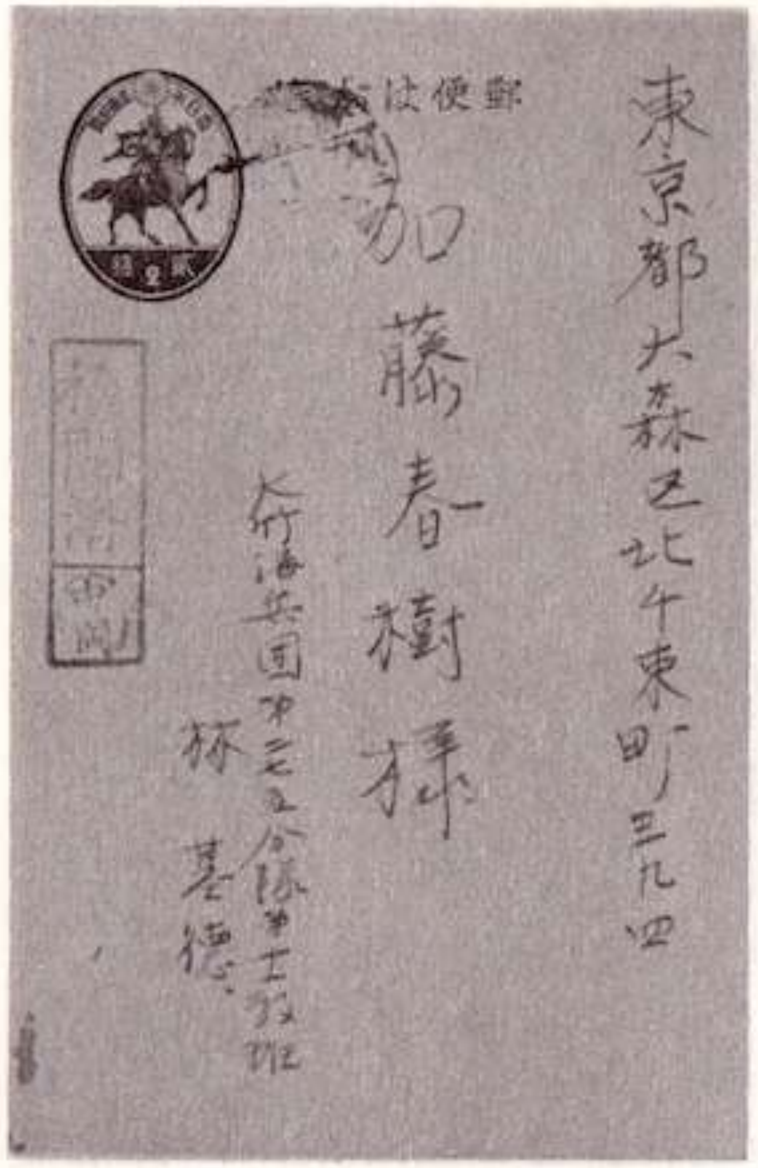

拝啓 其の後は御無音に打過ぎ誠に申訳ありません
部員一同一層精神を体して益々意気軒昂たるを
部報に見て無上の悦びを感じて居ます。
国防の第一線（支那は最早第一線ではないかも知れぬ）に
在って常に感ずるは蹴球の敢闘精神です。己れを捨て
、全体を活さんとするあの精神です。
畏友米山氏をブーゲンビルに失って米英に対する
敵愾心抑ふ可くもない。兄等亦同様であらうと思ふ。

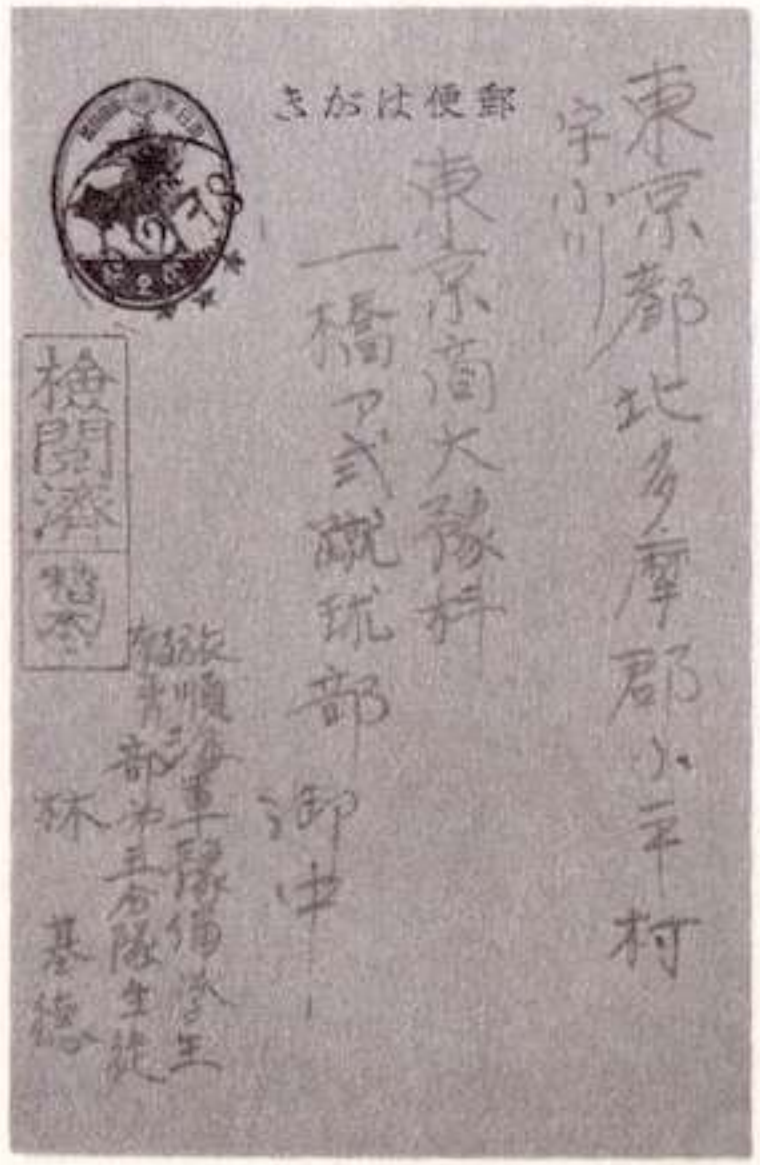

郵便はがき
軍事郵便
東京府北多摩郡谷保村国立
東京商科大学予科蹴球部御中
二月三日
北支派遣東第二九二五部隊
池尾隆二


御端書有難う。元気の由何より。俺も至極頑健


郵便はがき
大森区北千束町一丁目三九四
加藤春樹君
瀬藤俊雄




郵便はがき
東京都大森区北千束町一丁目三九四
加藤春樹様
林基徳


郵便はがき
東京都北多摩郡小平村
東京商大予科蹴球部御中
検閲済
林基徳

郵便はがき

東京都北多摩郡小平村
東京商科大学予科第二部
加藤春樹様

関東州旅順
旅順海軍予備学生教育部
海軍二等水兵 西條

検閲済

郵便はがき

[illegible]

郵便はがき

[illegible]

郵便はがき

東京都大森区北千束町三九四
加藤春樹
飲食物ノ送付ハ
[illegible]
検閲済

郵便はがき

[illegible]

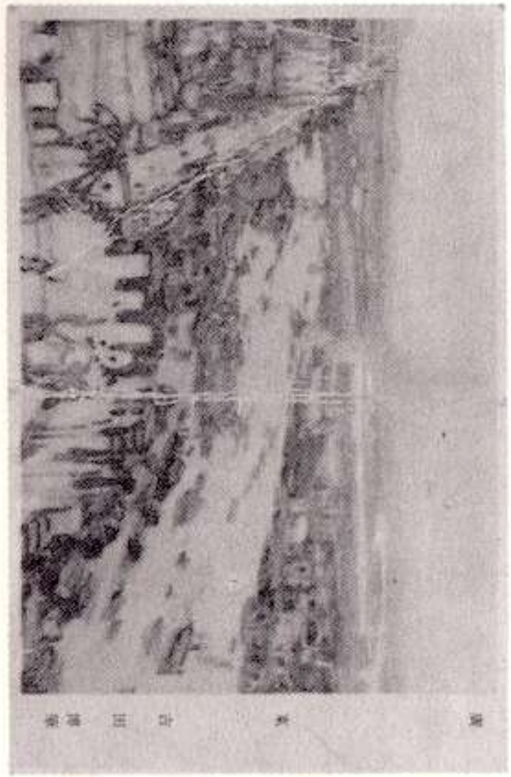
郵便はがき

東京府豊多摩郡[illegible]
陸軍造兵廠[illegible]
[illegible]様
[illegible]
二階堂 晴[illegible]

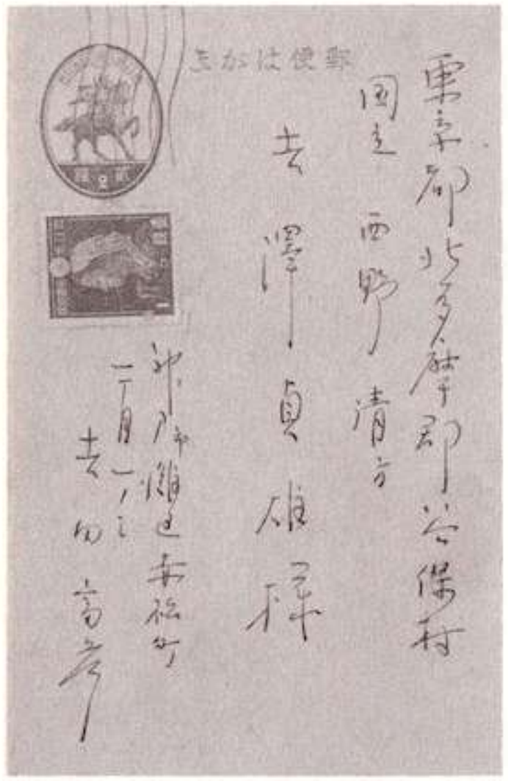
軍事郵便

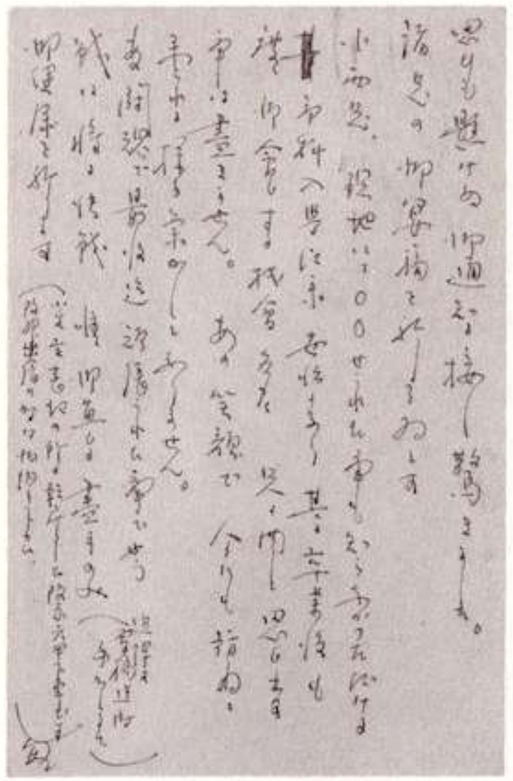
検閲済

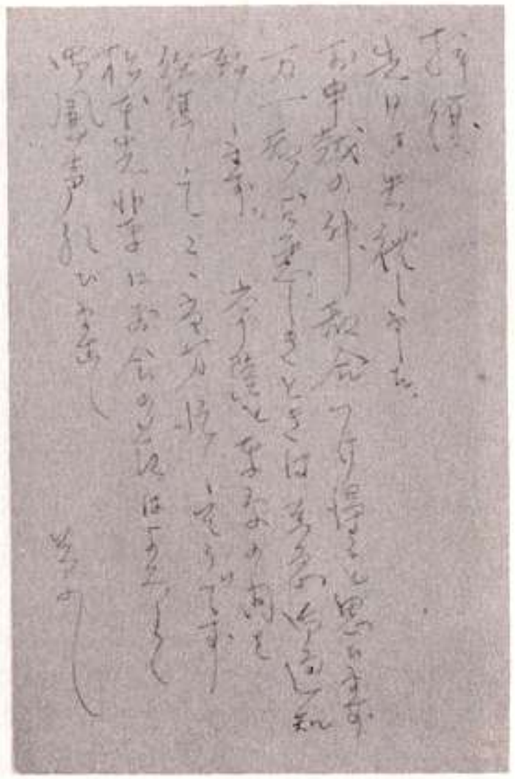
[illegible]

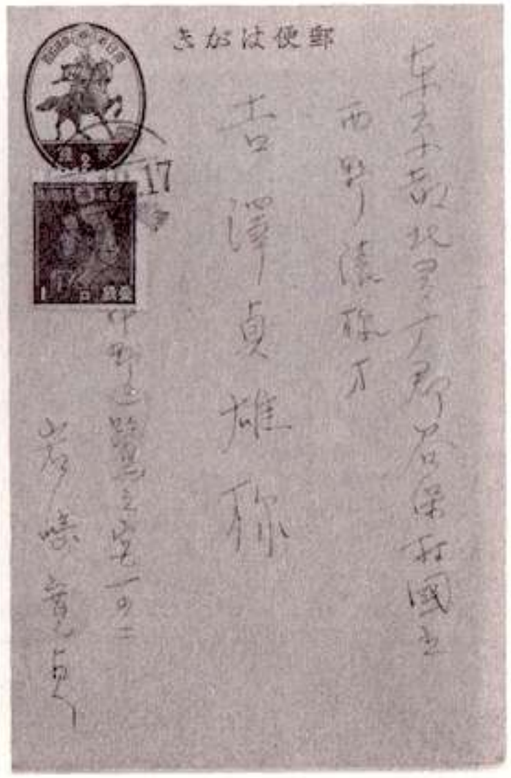


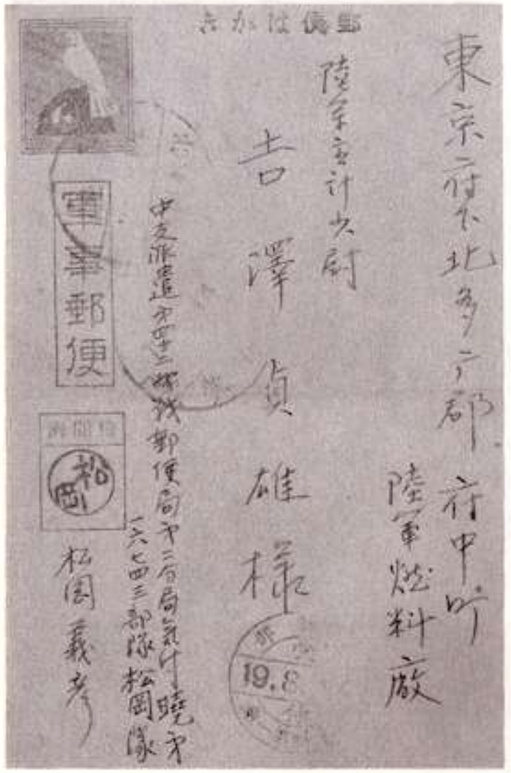
軍事郵便

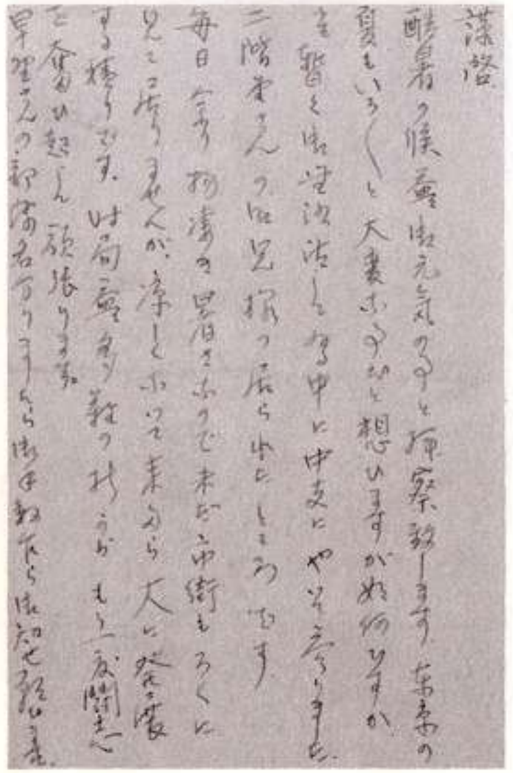

郵便はがき

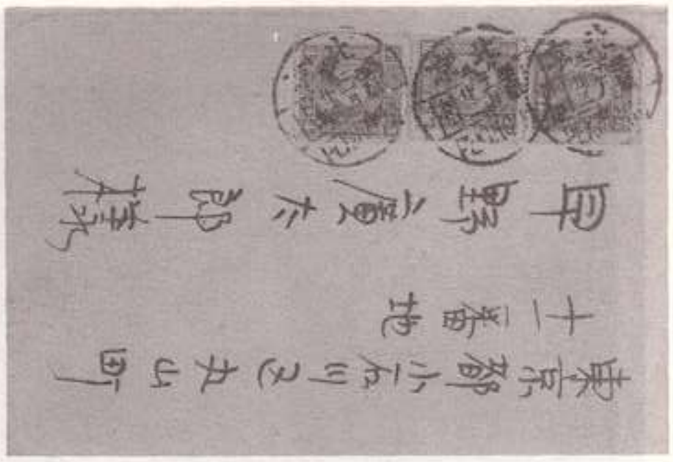


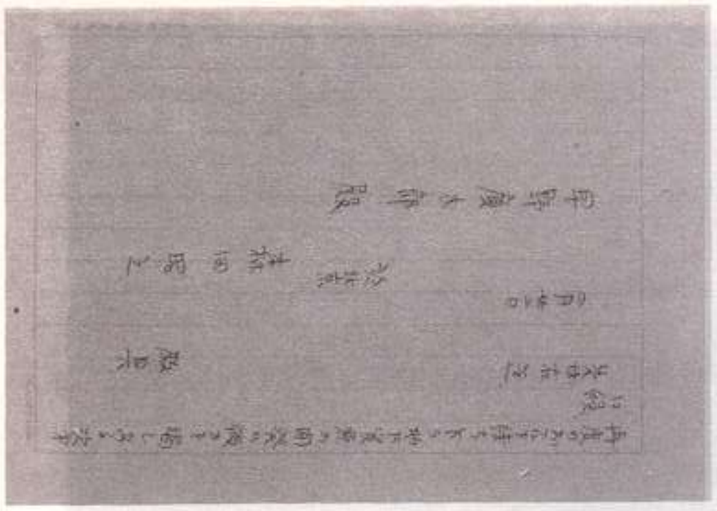


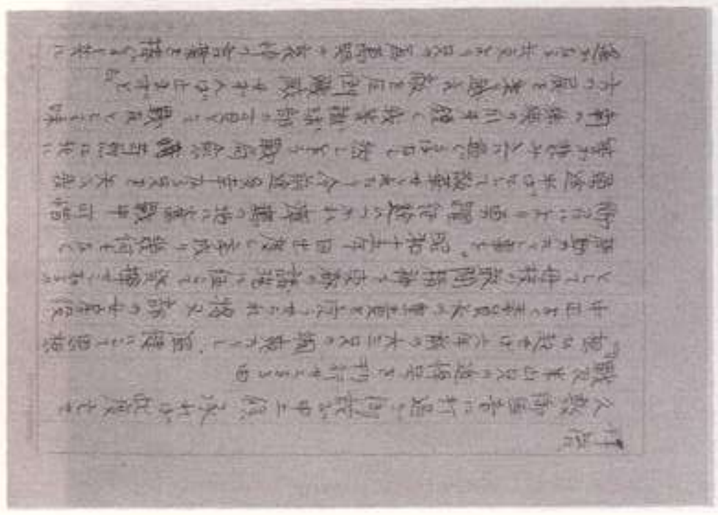

郵便はがき

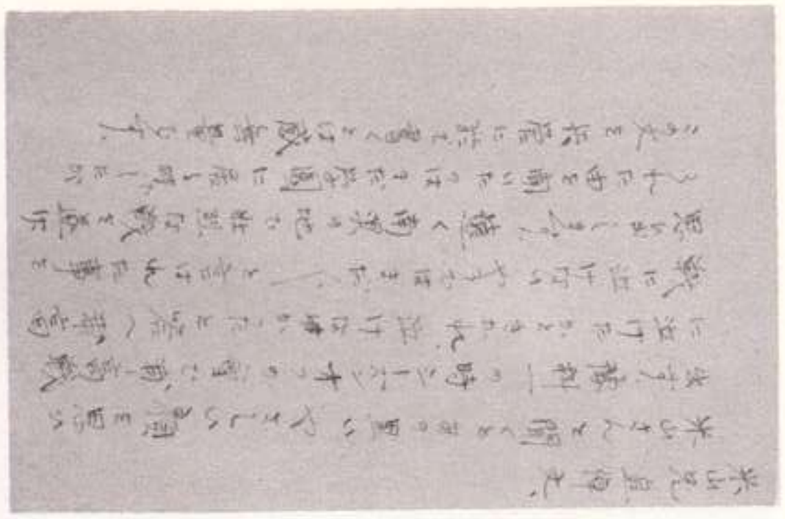

郵便はがき
軍事郵便

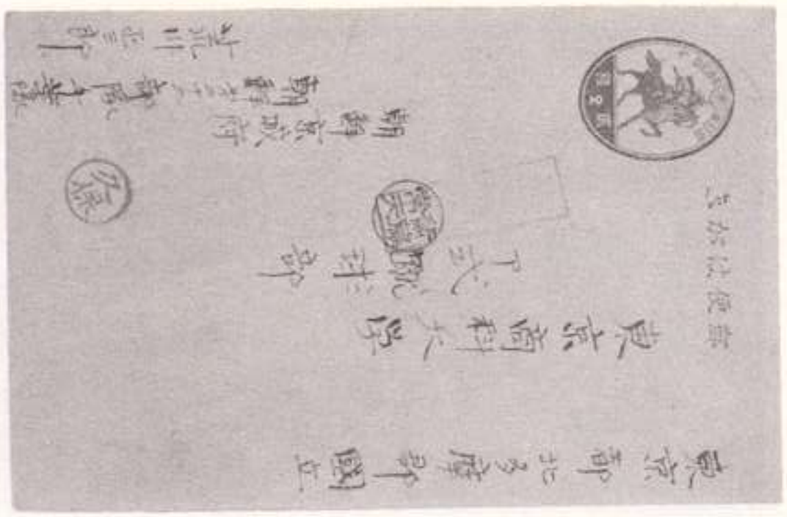


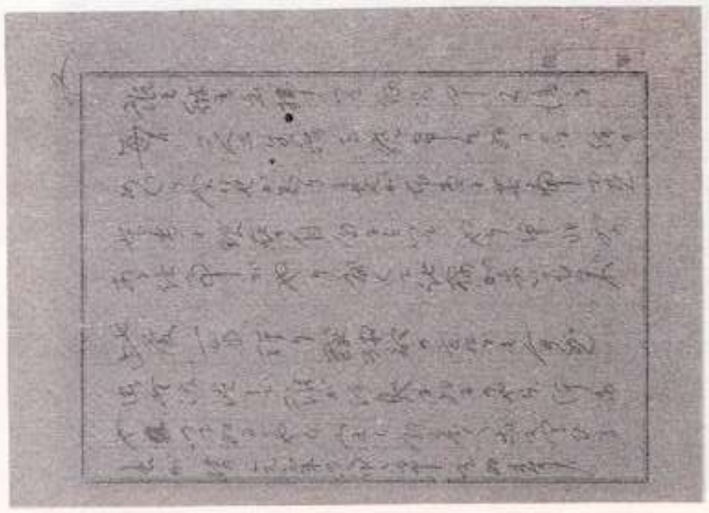


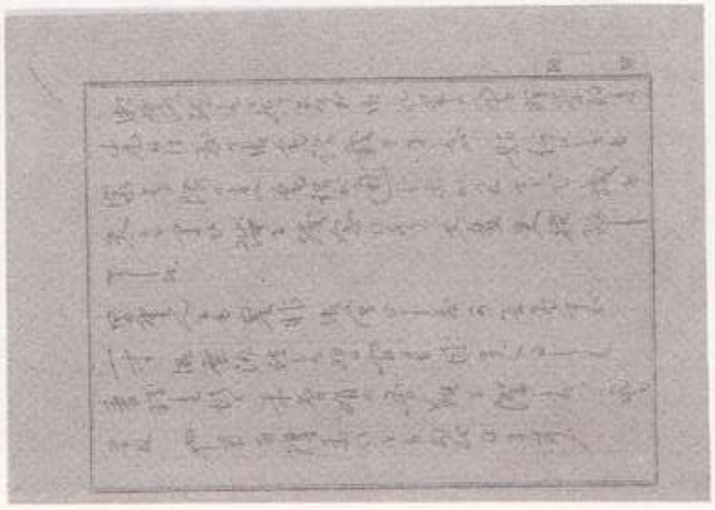


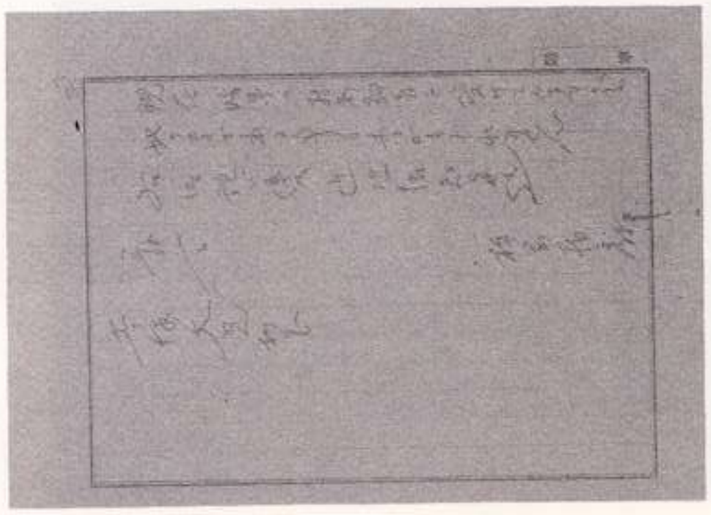


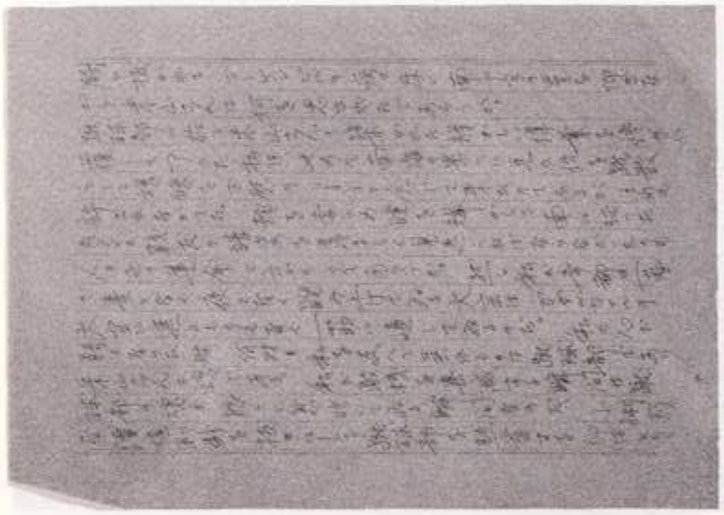


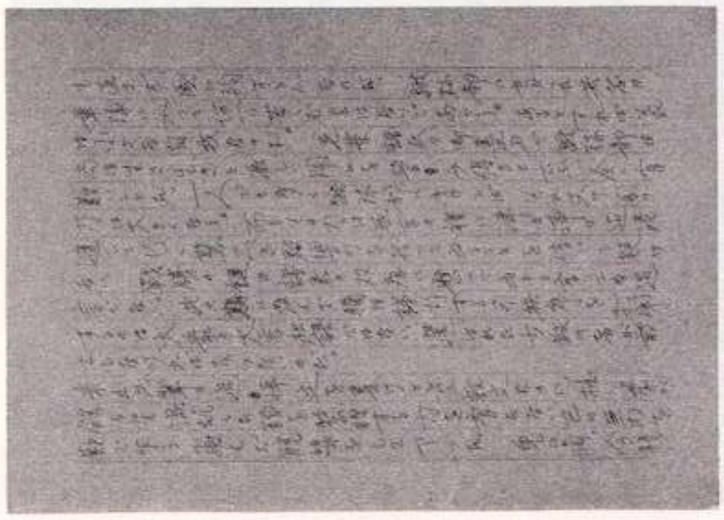


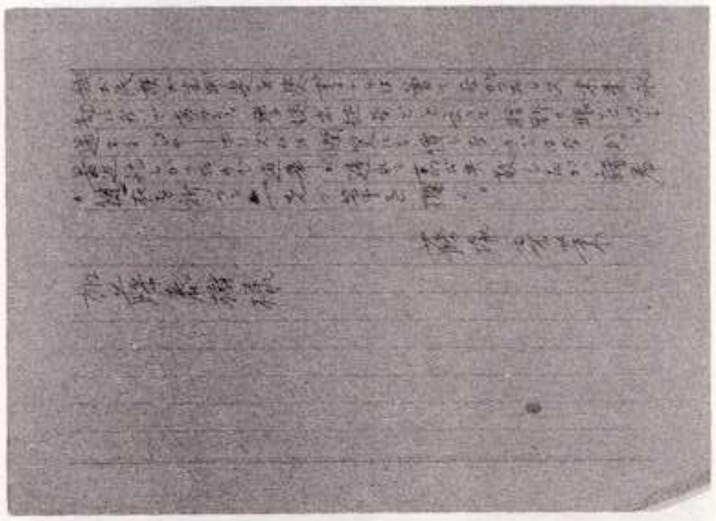


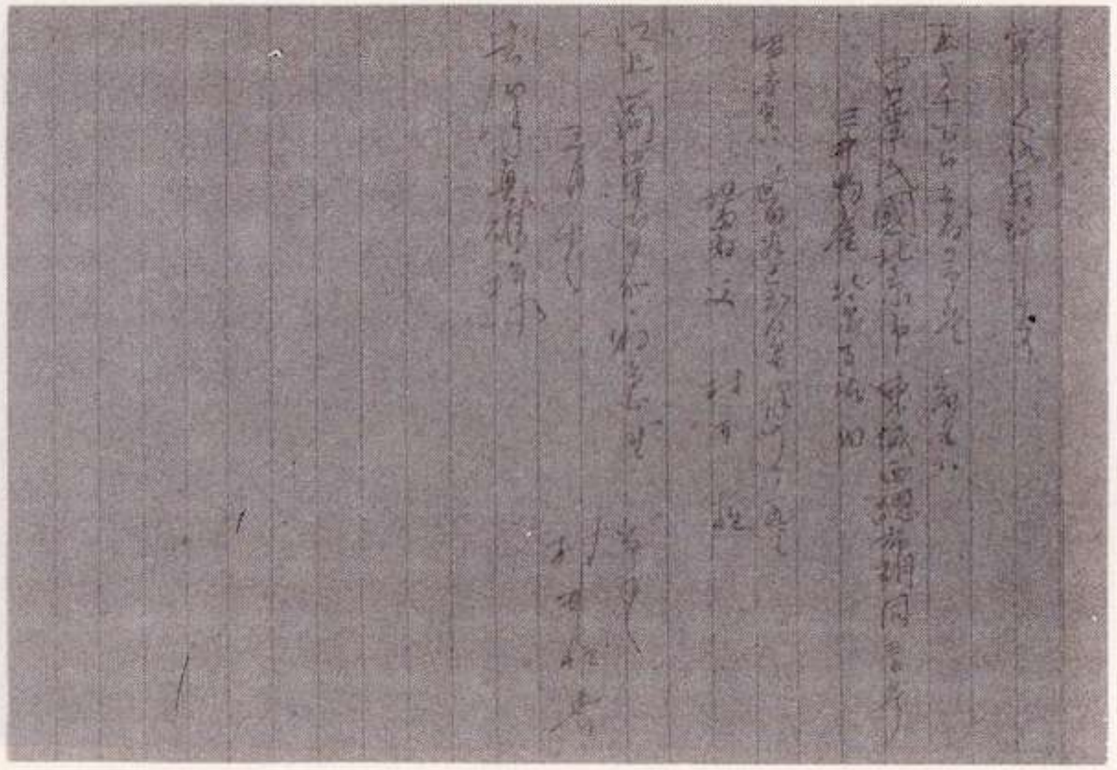


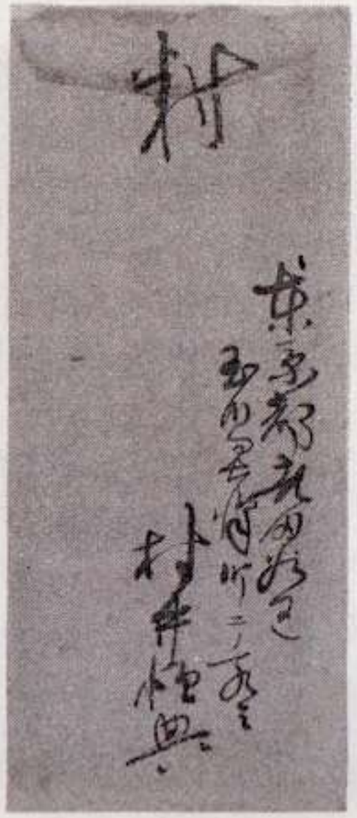


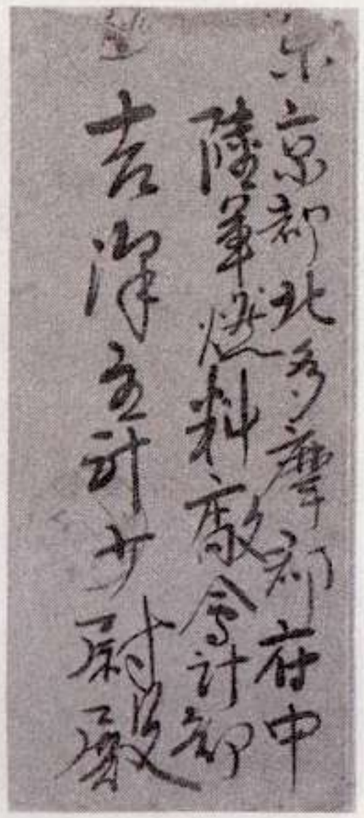












米山大三君追悼

南海ノ鬼と化ラレタル大三君ノ魂に
今を去る十年前陽光サン〳〵と注ぐ小平原頭之が
大兄と小生の初対面の舞台にして当時一ツカー部は已に
二部の覇者たる〳〵最も好潮の波に乗つて強く
此時の黒縁眼鏡をかけた華奢な五尺の矮軀異常ふる期待を
以て入部したる 蹴球部に入部する者多き中に初めから
ら影らも明瞭な強固な意志と剛毅を以て入部したる
者と思はれた 意気と闘志に燃えた進軍部を
入部せる大兄の其後の行動亦以て推して知るべし
黙々として不ルトに向つて獨り練習
部室に引上げる時 大兄獨り暮れかゝる球場に残り
球を蹴り立てゝ 佳わる迄
失望から入部当時は蹴球

東京 三井物産株式會社

（ ）

大兄の卒業する時の名監督振り 都下何数の否日本
球界に押しも押されぬ立派な部と育て上げて卒
業された大兄の偉業 [illegible]
不幸にして大兄は大兄の軍服姿を見ぬまに 高逝し
偲ぶ大兄の面影 さぞや [illegible]
大兄の模範的性格は 諸々たる戦果は
常に [illegible] 惜しみても余り有る
大兄の遺風の神去りました事は 國民の [illegible]
かゝる折 大兄は未だ〳〵多くの人の中に生きて [illegible]
[illegible]

靖國の神

捧げ文

東京 三井物産株式會社

編集後記

この戦前最後の部誌の原稿は、学徒出陣に残った加藤春樹が預っていて、彼が二十年一月十日に特甲幹で陸軍経理学校へ入学する前に、吉澤貞雄先輩（当時陸軍燃料廠）に預け、それを部史編集の志のあった村井恒典先輩が預り保管してあったものである。

当時、部誌はシーズンが終った時点で原稿を集め翌年の一～三月頃発刊されていた（遅れて五月になったものもあるが）のであった。この部誌は、十七年に原稿を集めて、十八年早々に刊行されるべきものであった。十七年のリーグ戦は春に行われ、十七年九月に本科三年生は卒業し、残ったメンバーによって書かれたものが主体であるが、発行されなかったので、翌十八年に入部した予科一年生の原稿、学徒出陣前の金原氏の原稿も入っているので、実質的に、十七、十八年合併号と云うことも出来る。

加えて当時の部員の写真、戦地や軍隊から来たハガキの写し（昭和十九年が主である）、戦績（安田興三郎先輩の記録による）、ＯＢ名簿、部員名簿（当時のまま）を収録した。

顧みれば、あれから約四十年の月日が流れ、当時の部員は紅顔の少年今いずこの嘆はあるものの、元気で各方面に活躍しているのは、サッカー部の御陰であろう。

ただこの部誌でサッカー部精神を説いて止まなかった神野、田島両先輩を始め、多くの先輩が鬼籍に入られ、私より一年先輩の、荒川、金原両兄が戦病死、戦死をされたことは誠に残念で惜しいことであった。又ガンさんこと松浦巌兄が去年急逝したことは実に寂しい限りであった。氏の真面目な真骨頂がこの部誌の原稿にも如実に出ており、兼松江商の社内誌の追悼号にもこの文章が再録された。

昭和十七年は日米戦争に勝っている時で、世の中もそれ程窮乏していなかったが、大学の年限短縮があり、十八年には次第に厳しさが増して来た。その間にあってともかく蹴球一筋の生活が送れたのは幸であった。

今頃この部誌を発刊するのは、そのままでは読みにくいこともあり、又私のセンチメンタリズムに他ならないのであるが、現役諸君に、何かの参考になれば幸である。

（昭和五六年十月五日　奥村　一郎）

蹴球　第九号　（非売品）

昭和十七年十二月一日　編集
昭和十八年十一月三十日　追加
昭和五六年十月三十日　印刷
昭和五六年十一月一日　発行

東京府立国立　東京商科大学内
編集兼　西内碩男
発行人　奥村一郎

川口市本町三丁目一番七号
印刷人　今井精一郎

発行所　東京商科大学ア式蹴球部